

『癩患者の告白』を読む－3

後 藤 隆

Content Analysis of Leper Confessions (1923)-3

Takashi Goto

Abstract: This paper analyses over 100 lines 12 cases in Leper Confessions(1923). These 12 cases total lines are 2990, 53.9% of Leper Confessions(1923) all lines. In Content Analysis of Leper Confessions(1923)-2, we find, from a certain individual to general ‘human beings’ level, the various characters tied with the negative expressions and episodes around the leper form as if ‘the leper harshness could capture anyone’s life’ rhetoric. Do we find this not logically necessary and sufficient rhetoric in those 12cases ? To make this point visible, we output 44 KWIC (Key Word In Context) analysis tables, focusing on the key words used in those various characters, negative expressions and episodes. (Due to space limitations, case2 KWIC analysis tables, table5-16 are printed. The other over 100 lines 11 cases, case3, 5, 22, 30, 32, 39, 41, 43, 44, 45, 66 KWIC analysis tables,table17-48 will be in another article.)

Key Words: Leper Confessions, content analysis, ‘the leper harshness could capture anyone’s life’ rhetoric, KWIC (Key Word In Context) analysis

要旨：私たちは既に、『癩患者の告白』を読む-2)において、個別の人物から「人類」までに及ぶ多種の登場人物と患者への嫌悪、敵視や罹患身体部位、症状等の列挙が結び付けられることによって、「どんな人であっても過酷でネガティブな「癩病」からは逃れられない」ことを強調するレトリックが形作られている点に注目した。本稿は、『癩患者の告白』中100行を越える12ケースについて、この点を可視化するために、KWIC分析によって、登場人物及びその先行／後続文脈を44の表に整理した。なお、紙幅の関係から、連番2に係るKWIC分析結果(図表5～16)を掲載し、100行を越える他の11ケース、連番3、5、22、30、32、39、41、43、44、45、66のKWIC分析結果(図表17～48)については、別稿とする。

キーワード：『癩患者の告白』、「どんな人であっても過酷でネガティブな「癩病」からは逃れられない」ことを強調するレトリック、KWIC分析、登場人物及びその先行／後続文脈

『癩患者の告白』を読む－3

後藤 隆

はじめに

本稿は、内務省衛生局が1921年に「各道府縣立療養所長に對して徴し」1923年に発表した『癩患者の告白』（①、172）所収の106名の患者の告白の内、告白の行数が100行を越える12ケース¹⁾について、既発表の『『癩患者の告白』を読む』『『癩患者の告白』を読む-2』（②、③）から得られた知見に基づき、主に登場人物及びその先行／後続文脈に注目した計量テキスト分析を行い、以って『癩患者の告白』所収106名の告白全体のテキスト・データとしての特性に次第に接近する手がかりを発見しようとする試みである。

- 1) なお、100行を越えるケースは13ケースあるが、「所収順に付した連番」の「1」については「九十首を越える、他の告白にはみられない多くの短歌を含んでいることから、外すこととした」（③、27-28）。

まず、あらためて『癩患者の告白』のテキスト・データとしての概要を確認するところから始めたい。

図表1は、『癩患者の告白』所収106名の年齢と行数の中央値、レンジ（最大値－最小値）、平均値である。²⁾

図表1

	中央値	レンジ	平均値
年齢	33	55	33.3
行数	27.5	579	59.8

- 2) なお、図表1、2、3いずれにおいても、年齢については、記載のない3名を除いた集計である。

図表2は、同じく106名の性別等ごとの年齢と行数の中央値、レンジ、平均値である。

図表2

性別	人数	年齢の中央値	年齢のレンジ	年齢の平均値	行数の中央値	行数のレンジ	行数の平均値
男	82	33.5	55	33.8	31	579	67.6
女	16	23	49	27.5	13	299	42
なし	8	35	20	35.7	16	39	19

図表3は、本稿で分析対象とする12ケースの年齢と行数の中央値、レンジ（最大値－最小値）、平均値である。³⁾

図表 3

連番	性別	年齢	行数
2	男	35	585
3	男	43	165
5	男	なし	325
22	男	32	158
30	男	44	219
32	男	35	355
39	男	32	125
41	男	44	156
43	男	41	297
44	男	31	223
45	男	34	161
66	男	24	221
	中央値	34.5	220
	レンジ	22	460
	平均値	36	249.2

3) 図表 3「連番」については、②、＜『癩患者の告白』整理表＞、pp.39-47。

図表 3 と、図表 1、2 を比べると、本稿で分析対象とする 12 ケースにあっては、性別が男に限られ、年齢の中央値「34.5」、平均値「36」は、図表 2「男」の中央値「33.5」、平均値「33.8」と近く、行数の中央値「220」、平均値「249.2」は、図表 1、2 いずれもの行数の中央値、平均値を大きく上回り、レンジ「460」は、図表 1 並びに図表 2「男」のレンジ「579」を下回っている。また、12 ケースの総行数 2990 は、『癩患者の告白』所収の男の告白の総行数 5544 の 53.9%にあたる。

これらデータ概要から、この 12 ケースは、『癩患者の告白』所収 106 名の中から、「男」の告白行数の過半を占める部分を取り出したものとなっていることがわかる。ただし、この 12 ケースでは、「男」の年少/年長者、「女」「性別なし」がカバーできないことは留意すべきである。

なお、この論文での引用は次の①～⑤の文献番号を付した文献、ソフトウェアからであり、本文中では（文献番号、頁）のように引用個所を示す。

- ①復刻編集版『近現代日本ハンセン病問題資料集成』、2003 年第 2 刷、不二出版、172-282 頁
- ②後藤隆「『癩患者の告白』を読む」、『日本社会事業大学研究紀要』第 63 集、2016 年度、27-51 頁
- ③後藤隆「『癩患者の告白』を読む-2」、『日本社会事業大学研究紀要』第 64 集、2017 年度、25-39 頁
- ④前田愛『増補文学テキスト入門』、ちくま学芸文庫、2016、第 16 刷
- ⑤ KWIC 分析には、KWIC Finder を、テキストファイルのみ検索可能なフリーウェアとして用いた。KWIC Finder Ver3.30 Copyright(C) 2000-2014 hishida@bg.mbn.or.jp

1. 分析視点：登場人物と先行／後続文脈

連番2「緒言」パラグラフを対象とした「多種の登場人物すべてをキーワードとしたKWIC分析」(③、34)からは、大きく2つの知見が得られている。

そのひとつは、「多種の登場人物」に係って、それが「個別の人物<家族親族<社会的地位／役割<ライフステージ<「人類」等の総称」というように、「個別<総称の包含関係を有する」ことである。(③、34、図表7)

もうひとつは、「多種の登場人物」の「先行／後続文脈」に、「「癩病」「患者」への嫌悪、敵視」や罹患身体「部位、症状」等を「列挙」する「過酷でネガティブな「癩病」観」(③、35)が確認されることである。

総じて、これら2つの知見は、互いに結び付けられることによって、「過酷でネガティブな「癩病」観」が「個別」～「総称」までのあらゆる登場人物に通底するが如く、言い換えれば「どんな人であっても過酷でネガティブな「癩病」からは逃れられない」ことを強調するレトリックとして働いているのである。このことを、図表4に模式的に示す。⁴⁾

図表4



図表4の⇔は本来論理的に必要十分の関係を表す⇔を□で囲み、{登場人物:S₁、S₂、S₃、…S_n}

の集合に入るヒトであればみな {「癩病」観:V₁、V₂、V₃、…V_n}のようになる／のことが起こる、そしてその逆も成り立つかのようなレトリック、つまり「どんな人であっても過酷でネガティブな「癩病」からは逃れられない」ことを強調するレトリックを表す記号としたものである。

さて、連番2「緒言」パラグラフから得られたこのレトリックは、今回の12ケースでも確かめられるだろうか。

以下では、この分析視点から、冒頭に記した登場人物及びその先行／後続文脈に注目した計量テキスト分析、具体的にはKWIC (Key Word In Context) 分析 (⑤) を行う。

4) 図表4は、「文学テキスト」について「主語的統合」と「述語的統合」を指摘した前田 (④、85) を援用したものである。

2. 12 ケースの KWIC 分析

2.1 連番 2 の KWIC 分析

連番 2 について、既に分析済みの「緒言」パラグラフを除いた、「私の発病の第一期」「父子の対面」「喜びと苦しみ」「一家の整理及瓦解」「渡る世間に鬼はなし」「入院と洗禮」「復生病院の創立と沿革」「魔鬼の罟」「失明」「騒動の顛末」「別れの一言」「希望」各パラグラフ毎に、「図表 4」に示した登場人物と「癩病」観に係る語をキーワード指定し KWIC 分析にかけた。結果を、順に、図表 5 ~ 16 に示す。なお、各小見出しについては、分析対象外とした。

図表 5

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	も夜が明けると例の通り	友	達の○○ちゃんが迎ひに来て呉れた。母は無事ツて今日は學校を御休みよう と云われたが
2	通り友達も○○ちゃんが迎ひに来て呉れた。	母	は氣違つて今日は學校を御休みよう と云われたが友の迎へに来て呉れた勇氣に勵まき
3	と云われたが私	私	は友の迎へに来て呉れた勇氣に勵まされて降り積る雪を踏シメく學校に行つた、學校は未だ
4	と云われたが私は	友	の迎へに来て呉れた勇氣に勵まされて降り積る雪を踏シメく學校に行つた、學校は未だ
5	校は未だ始業時間前の事として集まつた	生徒	は暖爐を取りまいてがや、騒いで居た。……鐘が鳴つた 生徒達は口々に種々と呼んで
6	頃	友	の一人が私の膝に浸みのあるのを見てや一怪我をしたまづつて見ると云われてまづ
7	頃友の一人が	私	の膝に浸みのあるのを見てや一怪我をしたまづつて見ると云われてまづつて見ると 大き
8	頃友の一人が私の膝に	浸み	のあるのを見てや一怪我をしたまづつて見ると云われてまづつて見ると 大きな水腫れ
9	大きな	水腫れ	が眞赤になる迄むけて衣類の上迄浸み出して居るを見た。自分より教えた友の方が通
10	迂むけて衣類の上迄浸み出して居るを見た。	自分	より教えた友の方が通かに驚いたらしい。眼を丸くして黙つて居た子供もあつた。先生
11	上迄浸み出して居るを見た。自分より教えた	友	の方が通かに驚いたらしい。眼を丸くして黙つて居た子供もあつた。先生を呼ばをかと云
12	い。眼を丸くして黙つて居た子供もあつた。	先生	を呼ばをかと云もある。中には痛いだらうと慰めて呉れるものもあつた。けれども怪我
13	らうと慰めて呉れるものもあつた。けれども	怪我	の原因は少しも判らなかつた。直ぐに眼を買つて歸る 事にした。……家の揚りかまに
14	大時はぶる・振へてやつとの思ひで一驚御	母	さんと云つ た丈である。目が醒めた時には枕元には藥瓶や蜜柑や菓子=盾7あるを見た
15	藥瓶や蜜柑や菓子=盾7あるを見た。思うに	醫者	や近所の人 達の心配の跡があり・と窺がはれる。氣分は稍快復した様であるが體一面
16	恢復した様であるが體一面=汗ばんで居た。	臭氣	は室 内に漲つて親連は心配そうな顔であつた。 驚くべし、前日と同様の水腫が腕と
17	内に漲つて	親連	は心配そうな顔であつた。 驚くべし、前日と同様の水腫が腕と親とに恰度十三、足が
18	驚くべし、前日と同様の	水腫	が腕と親とに恰度十三、足が悪く靡亂してあはび貝の様な形もあつた。付け様もない女
19	同様の水腫が腕と親とに恰度十三、足が悪く	靡亂	してあはび貝の様な形もあつた。付け様もない女もあつた。先生を呼ばをかと云
20	付け様もない	下女	はあれつくと胸せ寄つた母親は無言の體やがわあつと立き伏したので一同は俄かに
21	付け様もない女はあれつくと胸せ寄つた	母	親は無言の體やがわあつと立き伏したので一同は俄かに騒ぎ始めたが暫くにして又静か
22	親は無言の體やがわあつと立き伏したので	一同	は俄かに騒ぎ始めたが暫くにして又静かになつた。醫者が來た脈を取り聴診器をあて
23	に騒ぎ始めたが暫くにして又静かになつた。	醫者	が來た脈を取り聴診器をあて、見て一言をかし げて居たが手足の傷を數へて居た母は
24	げて居たが手足の	傷	を數へて居た母は最前から待ち兼ねた様にを掻き・尋ねた。「先生一體何と云ふ病
25	げて居たが手足の傷を數へて居た	母	は最前から待ち兼ねた様に涙を拭き尋ねた。「先生一體何と云ふ病氣でしよう……
26	云ふ	病氣	でしよう……」。醫者は迷惑そうな面付で「左様な別に内部に異7はありま
27	雪の爲に寒さに當てられ少し熱が出たので	病氣	の名なぞ何んでも宜しいやありませんか。瘧りますすよ、程度瘧りますすよ」。と答は簡單
28	」。と答は簡單であつた然し薬を得ない。	母	は「どう成つては家でも治療も出來ずどう云方法にしたら」和醫者は「困りましたなあ、
29	ません。治療法としては御家は幸廣くて殊に	人	手も深山御ありなさるから家やつた方が御子 供さんの爲に宜しい」と云捨て、歸つた。
30	さんの爲に宜しい」と云捨て、歸つた。之が	私	の九歳の時であつた。 彼の醫師はつい二、三月前此町へ開業した○○某であつた。最も
31	彼の	醫師	はつい二、三月前此町へ開業した○○某であつた。最も福山松城町に△△病院があつて
32	彼の醫師はつい二、三月前此町へ開業した	○○某	であつた。最も福山松城町に△△病院があつて多 くの患者は其處に治療を受けて居た
33	の患者は其處に治療を受けて居た。然し○○	醫師	は△△病院の其にも増して遙か投簡が秀で居つたし 近所でも在る處から來診をうたう。
34	し近所でも在る處から來診をうたう。	母	は信用ある事として其の言葉を信じ其後は毎日女を樂とりに 走らした。母は醫者となり看
35	は信用ある事として其の言葉を信じ其後は毎日	下女	を樂とりに 走らした。母は醫者となり看護婦となつて私の治療につとめて石炭酸の瓶や
36	走らした。	母	は醫者となり看護婦となつて私の治療につとめて石炭酸の瓶や軟膏や綿花や綿帯や金盞 は
37	走らした。母は醫者となり看護婦となつて	私	の治療につとめて石炭酸の瓶や軟膏や綿花や綿帯や金盞 は座敷一杯に散らされて足の踏み
38	足の踏み所もない程であつた。最も是れは	私	の宅は下宿屋で下宿の巡查、郵 便局員とか銀行員が毎日出勤した後の私の外科場である。
39	あつた。最も是れは私の宅は下宿屋で下宿の	巡查	、郵便局員とか銀行員が毎日出勤した後の私の外科場である。而し母の骨折りも素人の
40	便局員とか銀行員が毎日出勤した後の	私	の外科場である。而し母の骨折りも素人の悲しさに涉々しか らず全快迄には丸く五ヶ月の
41	が毎日出勤した後の私の外科場である。而し	母	の骨折りも素人の悲しさに涉々しか らず全快迄には丸く五ヶ月の長い日を費した。其の
42	月の長い月日を費した。其の間下宿の多くの	人	達は種々のいやな臭を嗅ぐの で大分臭い・と不平の言を洩すのを聞いた。……之を聞く親
43	を費した。其の間下宿の多くの人は種々の	いやな臭	を嗅ぐの で大分臭い・と不平の言を洩すのを聞いた。……之を聞く親連はひそかに
44	・と不平の言を洩すのを聞いた。……之を聞く	親連	はひそかに嘆息を洩したけれども客の多くは薄給の官吏とて雨のよいのと宿料の安い
45	雨のよいのと宿料の安いのと喜んで居た。	○○醫師	は一見癩病であることを 知つたが云ては營業上の障りになるのと家族の迷惑とを知つ
46	料の安いのと喜んで居た。○○醫師は一見	癩病	たることを 知つたが云ては營業上の障りになるのと家族の迷惑とを知つて病名を知らさ
47	知つたが云ては營業上の障りになると	家族	の迷惑とを知つて病名を知らさぬのは實に情けの深い、であると後で感謝する様なもの
48	業上の障りになると家族の迷惑とを知つて	病名	を知らさぬのは實に情けの深い、であると後で感謝する様なものである。自分の傷も醫
49	るを知つて病名を知らさぬのは實に情けの深い	人	であると後で感謝する様なものである。自分の傷も醫者の薬と母の介抱とにて漸く癒えた
50	である後で感謝する様なものである。	自分	の傷も醫者の薬と母の介抱とにて漸く癒えたが之が抑も癩 病の第一期で専門醫は眼球に
51	あると後で感謝する様なものである。自分の	傷	も醫者の薬と母の介抱とにて漸く癒えたが之が抑も癩 病の第一期で専門醫は眼球によつて
52	と後で感謝する様なものである。自分の傷も	醫者	の薬と母の介抱とにて漸く癒えたが之が抑も癩 病の第一期で専門醫は眼球によつて見分
53	する様なものである。自分の傷も醫者の薬と	母	の介抱とにて漸く癒えたが之が抑も癩 病の第一期で専門醫は眼球によつて見分けると云ふ
54	病の第一期で	専門醫	は眼球によつて見分けると云ふ。俗に癩病筋と云のがあつて絶えず首筋やひじ筋 が腫

55	専門医は眼球によって見分けると云ふ。俗に	癩筋筋	と云のがあつて絶えず首筋やひじ筋 が腫脹して居るを見る。之は患者自身も心得て
56	専門医は眼球によって見分けると云ふ。俗に	癩病	筋と云のがあつて絶えず首筋やひじ筋 が腫脹して居るを見る。之は患者自身も心得て
57	が	腫脹	して居るを見る。之は患者自身も心得て居るが他人の目に觸れる迄には十年もか
58	が腫脹して居るを見る。之は	患者自身	も心得て居るが他人の目に觸れる迄には十年もか」と云ふ。之に依つて考えれば
59	居るのを見る。之は患者自身も心得て居るが	他人	の目に觸れる迄には十年もか」と云ふ。之に依つて考えれば自分は母の胎内より病毎
60	ふ。之に依つて考えれば	自分	は母の胎内より病毎を受けて来たではあるまいか。實に恐ろしい事ではないか。小さい
61	ふ。之に依つて考えれば自分は	母	の胎内より病毎を受けて来たではあるまいか。實に恐ろしい事ではないか。小さい私は病
62	ふ。之に依つて考えれば自分は母の胎内より	病毒	を受けて来たではあるまいか。實に恐ろしい事ではないか。小さい私は病の床にあつて
63	ないか。小さい		は病の床にあつて毒を断つ爲に正月が来てても餅一と切れ魚一尾喰はれるでなく倦きくし
64	ないか。小さい私は病の床にあつて	毒	を断つ爲に正月が来てても餅一と切れ魚一尾喰はれるでなく倦きくした鯉味噌と粥に依つ
65	粥に依つて僅かに生命を繋いだのであつた。	友	達の聲が往來に聞ゆる時友達が私を見舞に來た時又自分を覗きに來た時床の上にある私は
66	いのであつた。友達の聲が往來に聞ゆる時	友	達が私を見舞に來た時又自分を覗きに來た時床の上にある私は子供ながらに早く癒つて皆
67	であつた。友達の聲が往來に聞ゆる時友達が	私	を見舞に來た時又自分を覗きに來た時床の上にある私は子供ながらに早く癒つて皆と一緒
68	見舞に來た時又	自分	を覗きに來た時床の上にある私は子供ながらに早く癒つて皆と一緒遊びたいと思つ
69	に來た時又自分を覗きに來た時床の上にある	私	は子供ながらに早く癒つて皆と一緒遊びたいなと思つた。
70	の時又自分を覗きに來た時床の上にある私は	子供	ながらに早く癒つて皆と一緒遊びたいなと思つた。
71	時床の上にある私は子供ながらに早く癒つて	皆	と一緒に遊びたいなと思つた。

図表 6

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	にては充分の治療も成り難からん當論には	名醫	も多数 あれば治療も思様致させ度傍ら勉強も存じ候へば早速來る様本人へも申含め置
2	致させ度傍ら勉強も存じ候へば早速來る様	本人	へも申含め置かれ度云々と大略右の如き手紙が母より來たと祖母が自分にどこかと突き
3	の如き手紙が	母	より來たと祖母が自分にどこかと突きつけた。私は直ちに行く旨を答へた。胸の動悸 は非
4	の如き手紙が母より來たと	祖母	が自分にどこかと突きつけた。私は直ちに行く旨を答へた。胸の動悸 は非常に高くなつ
5	の如き手紙が母より來たと祖母が	自分	にどこかと突きつけた。私は直ちに行く旨を答へた。胸の動悸 は非常に高くなつて來た
6	り來たと祖母が自分にどこかと突きつけた。	私	は直ちに行く旨を答へた。胸の動悸 は非常に高くなつて來た。口には出せないが嬉しく
7	ないが嬉しくてたまらない。口へ出したなら	祖母	の叱る事は判 つて居るが故に而し嬉しかった。實は私の母の函館へ旅立ちした跡は留守
8	つて居るが故に而し嬉しかった。實は	祖母	の母の函館へ旅立ちした跡は留守の祖母の冷然な有様は何時 か折があつたら逃げようとし
9	つて居るが故に而し嬉しかった。實は私の	母	の函館へ旅立ちした跡は留守の祖母の冷然な有様は何時 か折があつたら逃げようとし居る
10	。實は私の母の函館へ旅立ちした跡は留守の	祖母	の冷然な有様は何時 か折があつたら逃げようとし居る先失此の手紙で私の望みが達せる
11	があつたら逃げようとし居る先失此の手紙で	私	の望みが達せるかと思へば其の夜は遂に一睡も出 來なかつた。岩田岡清点から函館行き
12	午前六時半丁度	自分	は十歳の時である。……船は鐘を響て間も汽笛一聲轟響を掲げて動き出した「デツ
13	し始めた。船は激浪に弄ばざれば沈没するかと	女小供	は髪もどろに恋鳴 を掲げる者もある。流石にボーイは嘔吐壺を機敏に運ぶ。波は平
14	を掲げる	者	もある。流石にボーイは嘔吐壺を機敏に運ぶ。波は平穩に歸したと気がついた時には函館
15	を掲げる者もある。流石に	ボーイ	は嘔吐壺を機敏に運ぶ。波は平穩に歸したと気がついた時には函館 が間近く迫つて居
16	居るので多少安堵らしい……毎日船に遊んだ	私	も航海したのは初めて故死にそうな 苦しみをした。 港口の臥牛山の要塞が出来たもの
17	樓は併び立ちて	人	の往來も手に取るが如く餘隙の如く重なり合つて居る町は實に美しかった。鐵道馬車 が汽車
18	と、思つて上陸する。棧橋際に集つた	車夫	は頻りに客を呼ぶ。客の荷を引たくる様に抱えて行く荷引 もある。私は人力車に乗った
19	の棧橋際に集つた車夫は頻りに客を呼ぶ。	私	の荷を引たくる様に抱えて行く荷引 もある。私は人力車に乗った。車は一目散に駆けた。
20	もある。	私	は人力車に乗った。車は一目散に駆けた。あまたの尋ねる何々樓は此處と……。硝子障
21	私は人力車に乗った。車は一目散に駆けた。	あなた	の尋ねる何々樓は此處と……。硝子障 子は明いた。女達は大勢出て廊下に並んで姐
22	子は明いた。	女	達は大勢出て廊下に並んで姐さん來ましたよ姐さん・とすると母親は慌しく出て來て「
23	子は明いた。女達は大勢出て廊下に並んで	姐さん	來ましたよ姐さんくとすると母親は慌しく出て來て「をや一人でかい今來るなら先
24	並んで姐さん來ましたよ姐さんくとすると	母	親は慌しく出て來て「をや一人でかい今來るなら先に電報でも打てば迎へに行くものを」
25	私は此の	家内	の大勢と立派な構とに暫し愕然として居た。此處は私の縁家で蓬萊町の娼樓何々樓で
26	立派な構とに暫し愕然として居た。此處は	私	の縁家で蓬萊町の娼樓何々樓で母の假寓したる家である。是から此處に居られるかと思
27	た。此處は私の縁家で蓬萊町の娼樓何々樓で	母	の假寓したる家である。是から此處に居られるかと思へば見るもの聞くもの皆嬉しく水道
28	で市中を徘徊しては二三日面白く過つた。或日	御前	は一寸來てと云う。行て見ると「部屋に這込んだ。さい、御前に達はしてやる人がある」
29	さい。	御前	に達はしてやる人がある」と行くと年次三十四、五にもならうか、髭もぢやの
30	と年次三十四、五にもならうか、髭もぢやの	男	が座つて 居た。私は静かに手を突きて客に挨拶した。又母に向直して「何御用でありますか
31	居た。	私	は静かに手を突きて客に挨拶した。又母に向直して「何御用でありますか」と問うた。母も
32	居た。私は静かに手を突きて	客	に挨拶した。又母に向直して「何御用でありますか」と問うた。母も男も無言であつた。唯
33	た。私は静かに手を突きて客に挨拶した。又	母	に向直して「何御用でありますか」と問うた。母も男も無言であつた。唯目と目を見合わ
34	のみであつた。室内の空氣は緊張した。纏て	男	は口を開いて「大きくなつた今年幾つかと」と母は笑ひながら「貴郎十ですよ」と簡単な
35	「大きくなつた今年幾つか」と	母	は笑ひながら「貴郎十ですよ」と簡単な答に是が眞實な父であらうとお夢にも知らな
36	かも知れぬ。	御前	の御父さんだよ！ 私にはさつぱり要領を得なかつた只もじ・うつむいも黙つて 何ん
37	かも知れぬ。御前の	御父さん	だよ！ 私にはさつぱり要領を得なかつた只もじ・うつむいも黙つて 何んと云う
38	かも知れぬ。御前の御父さんだよ！	私	にはさつぱり要領を得なかつた只もじ・うつむいも黙つて 何んと云う言葉も出なかつた
39	何んと云う言葉も出なかつた。此處で今	自分	は父と呼ぶ人に付て語らねばならぬ。 私の家は私で恰度三代になる。祖父の時代に貧
40	私	私	の家は私で恰度三代になる。祖父の時代に資産數業を營んで居た。明治二十年の頃一
41	私の家は私で恰度三代になる。	祖父	の時代に資産數業を營んで居た。明治二十年の頃一人の青年が 祖母を訪れて來た。同じ
42	産數業を營んで居た。明治二十年の頃一人の	青年	が 祖母を訪れて來た。同じ圖物だと云う。其れから祖母の取なしに依つて長く家に居る
43	を訪れて來た。同じ圖物だと云う。其れから	祖母	の取なしに依つて長く家に居る事に成た。毎日 能く働いた。置て見ると割合に正直な所
44	置て見ると割合に正直な所があるから	祖父	は非常に氣に入つた。其時私の家に恰度彼の 男に似合つた養女があつた。名をみつとて
45	所があるから祖父は非常に氣に入つた。其時	私	の家に恰度彼の男に似合つた養女があつた。名をみつとて美貌と云程でもないが讀み書き
46	男に似合つた	養女	があつた。名をみつとて美貌と云程でもないが讀み書き繪針等一通りは心得て居 た。
47	男に似合つた養女があつた。名を	みつ	とて美貌と云程でもないが讀み書き繪針等一通りは心得て居 た。彼の男わ年記と云動
48	た。彼の	男	わ年記と云動勅と云い祖父の意に叶つた所から彼の女の結婚は成り立つた。然し世はい
49	た。彼の男わ年記と云動勅と云い	祖父	の意に叶つた所から彼の女の結婚は成り立つた。然し世い つも順調には行かない物
50	と云動勅と云い祖父の意に叶つた所から彼の	女	との結婚は成り立つた。然し世い つも順調には行かない物で成る事から此の結婚は
51	事から此の結婚は美事に破壊された。其れは	祖父	の留守を幸に祖 母は勝手に聲を離別した。……理由は無學で帳簿の整理が出来ぬ、
52	母は勝手に	聲	を離別した。……理由は無學で帳簿の整理が出来ぬ、……役に立たぬ、讀ゆる家風 に
53	最愛の	妻	を残して而もみつ子は懐妊六月ヶ月として見れば随分悲しい事であつたらう。……男は其れ
54	て見れば随分悲しい事であつたらう。……	男	は其れ から其れと漂浪して十年目に此處に來て計らずも夫婦は再會し得たのである。
55	其れと漂浪して十年目に此處に來て計らずも	夫婦	は再會し得たのである。此頃は相生町のとある貧家借りて駄菓子屋などして僅かの

56	閑の寂しい生活をして居たのに思えかけなくも	みつ子	との再會に積る數々の悲しい話も出たであらう。此時自分の父である事が知れて俺も
57	らう。此時	自分	の父である事が知れて俺も父があるのかと思えば聊か肩身が廣い様な大人になつた様
58	も父があるのかと思えば聊か肩身が廣い様な	大人	になつた様 な氣もして其後毎日父の元え遊びには行は市中を見物さして貰つては
59	月に村家は又此	親子	の上に覆つて悲しい事には一週間の後店を畳む事になつた。事は母以外に知るの
60	い事には一週間の後店を畳む事になつた。事は	母	以外に知るのは天地の神のみであつた私は痛く失望した。此處で母の事について記す必要が
61	は天地の神のみであつた	母	は痛く失望した。此處で母の事について記す必要がある。 祖母は何一つ不足なく女主人と
62	の神のみであつた私は痛く失望した。此處で	母	の事について記す必要がある。祖母は何一つ不足なく女主人として一家を支配して居たが
63	祖母は何一つ不足なく	女主人	として一家を支配して居たが祖父の亡き後は二三人の養女娘を藝妓に する事を憚らな
64	祖母は何一つ不足なく女主人として	一家	を支配して居たが祖父の亡き後は二三人の養女娘を藝妓に する事を憚らなかつた。金の
65	不足なく女主人として一家を支配して居たが	祖父	の亡き後は二三人の養女娘を藝妓に する事を憚らなかつた。金の爲には何の恥する事無く
66	家を支配して居たが祖父の亡き後は二三人の	養女娘	を藝妓に する事を憚らなかつた。金の爲には何の恥する事無く鬼の如き祖母の爲に三人
67	を憚らなかつた。金の爲には何の恥する事無く	鬼	の如き祖母の爲に三人の子羊は苦界に身を沈め る事となつた。……母は昔六ヶ月にして夫
68	は何の恥する事無く鬼の如き祖母の爲に三人の	子羊	は苦界に身を沈め る事となつた。……母は昔六ヶ月にして夫に別れ今又親の爲とあつて
69	る事となつた。……	母	は昔六ヶ月にして夫に別れ今又親の爲とあつて不本意ながら承諾した狼と狐 腹黒の祖母は
70	る事となつた。……母は昔六ヶ月にして	夫	に別れ今又親の爲とあつて不本意ながら承諾した狼と狐 腹黒の祖母は嫁家の某と結託して
71	つた。……母は昔六ヶ月にして夫に別れ今又	親	の爲とあつて不本意ながら承諾した狼と狐 腹黒の祖母は嫁家の某と結託して此の子羊を面
72	腹黒の	祖母	は嫁家の某と結託して此の子羊を面館の縁に托し藝妓として檢査に通はしむることにな
73	腹黒の祖母は嫁家の	某	と結託して此の子羊を面館の縁に托し藝妓として檢査に通はしむることになつた。母は
74	腹黒の祖母は嫁家の某と結託して此の	子羊	を面館の縁に托し藝妓として檢査に通はしむることになつた。母は年増の藝者として
75	の某と結託して此の子羊を面館の縁に托し	藝妓	として檢査に通はしむることになつた。母は年増の藝者として可なり人気があつた。同
76	つた。	母	は年増の藝者として可なり人気があつた。同輩からも姐さん姐さんと云はれた私はコーシ
77	つた。母は年増の	藝者	として可なり人気があつた。同輩からも姐さん姐さんと云はれた私はコーシタ 母と共に
78	母は年増の藝者として可なり人気があつた。	同輩	からも姐さん姐さんと云はれた私はコーシタ母と共に起き伏しいつ迄も母と暮らしたか
79	あつた。同輩からも姐さん姐さんと云はれた	私	はコーシタ母と共に起き伏しいつ迄も母と暮らしたかつた。然しこれが遊樂の事であるが
80	であつた。母は	母	は私の教育に付て痛く心を痛めた愈他に家を借り従弟の太郎を附添として恵比壽町の○ 番
81	であつた。母は	私	の教育に付て痛く心を痛めた愈他に家を借り従弟の太郎を附添として恵比壽町の○ 番地え
82	の教育に付て痛く心を痛めた愈他に家を借り	従弟の太郎	を附添として恵比壽町の○ 番地え移つた。廊から程遠くないので前に述べた○〇樓
83	た。廊から程遠くないので前に述べた○〇樓の	娼妓達	は毎日私の家遊び場所とはして毎週の 検査日には大勢の女連が出るので月々の入
84	遠くないので前に述べた○〇樓の娼妓達は毎日	私	の家遊び場所とはして毎週の 検査日には大勢の女連が出るので月々の入費は莫大な物
85	検査日には大勢の	女	連が出るので月々の入費は莫大な物ではには母も當惑した様であつた。其處で 西川町、
86	が出るので月々の入費は莫大な物ではには	母	も當惑した様であつた。其處で 西川町、東川町、船場町、汐留町と宿を變えたが何んの理
87	えたが何んの理由か其の先々が音断られた。	母	は再び當惑 した國元えは祖母の扶助料を送らねばならず、私は私で入費も要るので一層國
88	した國元えは	祖母	の扶助料を送らねばならず、私は私で入費も要るので一層國元にある家を疊んで手 元え
89	した國元えは祖母の扶助料を送らねばならず、	私	は私で入費も要るので一層國元にある家を疊んで手 元え呼び寄せたならば祖母には孝とな
90	元え呼び寄せたならば	祖母	には孝となり、二には自分も都合よしと速かに郷里え手紙を送つた。而し 之れは宜い考
91	呼び寄せたならば祖母には孝となり、二には	自分	も都合よしと速かに郷里え手紙を送つた。而し 之れは宜い考では無かつた。祖母は賣る
92	之れは宜い考では無かつた。	祖母	は賣る可き物は賣り拂う可き物は賣り一切を纏めて住み別れた福山 是後に函館に出た。
93	下女と	自分	と予と其れえ猫と五人の家の内で先づ之れと安心として居たのは僅か二ヶ月計り、或
94	下女と自分と予と其れえ猫と五人の	家内	で先づ之れと安心として居たのは僅か二ヶ月計り、或日 私の腕に大きな田蟲が発見
95	私の腕に大きな	田蟲	が発見された。「之れは何んだらを婆やこんな物が俺れの腕に出来た」と私はコー 云て
96	きな田蟲が発見された。「之れは何んだらを	婆や	こんな物が俺れの腕に出来た」と私はコー 云て見た。祖母は一見醫者の如く田蟲だと
97	された。「之れは何んだらを婆やこんな物が	俺	れの腕に出来た」と私はコー云て見た。祖母は一見醫者の如く田蟲だと云た。翌日近所
98	云て見た。	祖母	は一見醫者の如く田蟲だと云た。翌日近所の醫者に見せると眼鏡越しに「之れは田 蟲だ
99	云て見た。祖母は一見	醫者	の如く田蟲だと云た。翌日近所の醫者に見せると眼鏡越しに「之れは田 蟲だから二三日
100	云て見た。祖母は一見醫者の如く	田蟲	だと云た。翌日近所の醫者に見せると眼鏡越しに「之れは田 蟲だから二三日薬を塗れば
101	は一見醫者の如く田蟲だと云た。翌日近所の	醫者	に見せると眼鏡越しに「之れは田 蟲だから二三日薬を塗れば癒る」と果して二三日の内
102	二三日の内に癒つた。鶴岡町は場末の事と	母	の通うのに不便で又他え轉ずる事にした。折しも廊の近くである養生町に比較的家賃も安
103	で	家主	との交渉もつき明日とも云わず引越ことにした。母も主人と折合よ二三日後から
104	もつき明日とも云わず引越ことにした。母も	主人	と折合よ二三日後から此に親子揃うて永く住む事になつて毎日母は此處から檢査に
105	た。母も主人と折合よ二三日後から此に	親	子揃うて永く住む事になつて毎日母は此處から檢査に 通う事になつた。
106	子揃うて永く住む事になつて毎日	母	は此處から檢査に 通う事になつた。

図表7

各因表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	来た計りの事或日見馴れぬ五十恰好の半白の	人	が門に或つて「少し御母ね致します。福山から来た○〇様はごち様でしょうか？」庭に居
2	福山から来た	○〇様	はごち様でしょうか？」庭に居た私は「はい左様です婆や御客様です……」祖 母との
3	来た○〇様はごち様でしょうか？」庭に居た	私	は「はい左様です婆や御客様です……」祖 母との話を聞くと客「御母さん御忘れになりま
4	様でしょうか？」庭に居た私は「はい左様です	婆や	御客様です……」祖 母との話を聞くと客「御母さん御忘れになりましたか私は△△で
5	を聞くと客「御母さん御忘れになりましたか	私	は△△で」祖母は尚判らない。「△△く」と 繰越して居た客は「御忘れも御婆も、私
6	御母さん御忘れになりましたか私は△△で	祖母	は尚判らない。「△△く」と 繰越して居た客は「御忘れも御婆も、私は三十年ば
7	繰越して居た	客	は「御忘れも御婆も、私は三十年ばかり前に大變な御世話になりました備御便りも 致さ
8	繰越して居た客は「御忘れも御婆も、	私	は三十年ばかり前に大變な御世話になりました備御便りも 致さず何とも申譯ありません
9	ありません」と只管詫入つた漸く考え出した	祖母	は「あれマー△△さんですからい御年を召しましたなあ」と種々應答の上一と間に掛
10	管詫入つた漸く考え出した祖母は「あれマー	△△	きんですから い御年を召しましたなあ」と種々應答の上一と間に掛り三十年來の積る
11	姿の變つた色々の話に	御父	に驚き合せて居た。此人は當時元町にある耶穌教會のソコに雇われて居た。三十年前
12	とした事もあつたことが	私	の祖父祖母に助けられて僅かに糊口を凌いで居たものゝ 顯然志事事あつて 夜逃同僚家財を
13	とした事もあつたことが私の	祖父祖母	に助けられて僅かに糊口を凌いで居たものゝ 顯然志事事あつて 夜逃同僚家財を疊ん
14	夜逃同僚家財を疊んで函館に出たが多くの	子供	と貧乏に攻められて總ての難難を管め盡して此處に至つたのであると……いろいろと話
15	義理がたい	人達	わ折々訪問し呉れる。「あの福山の○〇ですかどうして引越つて来たのでしょ」一樣に
16	い人達わ折々訪問し呉れる。「あの福山の	○〇	ですかどうして引越つて来たのでしょ」一樣に 云つた。あまり私の家が零落したので同
17	い人達わ折々訪問し呉れる。「あの福山の	○	ですかどうして引越つて来たのでしょ」一樣に 云つた。あまり私の家が零落したので同
18	こう云た。あまり	私	の家が零落したので同情して呉れた。之れは某及某に依つて補助を仰ぐ事になつた。伯母
19	こう云た。あまり私の	家	が零落したので同情して呉れた。之れは某及某に依つて補助を仰ぐ事になつた。伯母
20	の家が零落したので同情して呉れた。之れは	某	及某に依つて補助を仰ぐ事になつた。伯母の花子も岩内から引揚げて来た。祖母に孝道
21	た。	伯母	の花子も岩内から引揚げて来た。祖母に孝道を盡す爲に母と協力して呉れた。然し其
22	た。伯母の花子も岩内から引揚げて来た。	祖母	に孝道を盡す爲に母と協力して呉れた。然し其の時の 伯母は某の妾になつて居た。故に
23	内から引揚げて来た。祖母に孝道を盡す爲に	母	と協力して呉れた。然し其の時の 伯母は某の妾になつて居た。故に自由のさかぬ身であつ

24	伯母は	某	の妾になつて居た。故に自由のきかぬ身であつたけれども△△某と伯母と某とに依つて月
25	母は某の妾になつて居た。故に自由のきかぬ	身	であつたけれども△△某と伯母と某とに依つて月々 幾らかの援助を受ける事になつた。こ
26	居た。故に自由のきかぬ身であつたけれども	△△	某と伯母と某とに依つて月々 幾らかの援助を受ける事になつた。こうした母は百萬の味
27	幾らかの援助を受ける事になつた。こうした	母	は百萬の味方を得た思で身軽になつた。……二三 年は何事もなく極平和で芝居に行つ
28	年は何事もなく極平和で芝居に行つた。時	訪問客	は相變らず絶え間なくビール、正宗、酢、天麩羅等 聊かの不自由も感じなかつた。時
29	聊かの不自由も感じなかつた。時々	一家	揃つて面白可笑しく暮した事もある。春夏秋冬花開き花散る は自然の法則であるが神
30	るは自然の法則であるが	神	は此一少働業を何時送もつかしては置かなかつた。私は一寸した病儀が元で素人の治
31	療で少し過ぎたので一日をききに船場町の	私	は一寸した病儀が元で素人の治療では少し過ぎたので一日をききに船場町の××醫師
32	た。斯くする事二三ヶ月、	××醫師	の許に通つた。斯くする事二三ヶ月、傷は掛つたやうになつた。私は學校も醫
33	傷は掛つたやうになつた。私は學校も醫	傷	は掛つたやうになつた。私は學校も醫者でも通つた。傍ら家の幼時 も足した。或日郷
34	事二三ヶ月、傷は掛つたやうになつた。	私	は學校も醫者でも通つた。傍ら家の幼時 も足した。或日郷里から来て居る某が警部の試
35	傷は掛つたやうになつた。私は學校も	醫者	えも通つた。傍ら家の用事も足した。或日郷里から来て居る某が警部の試験の高留置し
36	も足した。或日郷里から来て居る	某	が警部の試験の高留置した。私の顔を見て「御前の顔は」と云たが後は無言であつた
37	私の顔を見て「	私	の顔を見て「御前の顔は」と云たが後は無言であつた。祖母は折々母に「○の顔を
38	○御前の顔は」と云たが後は無言であつた。	祖母	の顔は」と云たが後は無言であつた。祖母は折々母に「○の顔を 氣付かぬか
39	祖母の顔は」と云たが後は無言であつた。祖	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
40	氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と	水腫	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
41	水腫と云い眉毛の薄くなつた工合と云いど	人達	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね……之は御母さんの胎毒でせう其れなら草津
42	人の病いだらうを御氣の毒すね……之は御	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
43	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
44	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
45	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
46	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
47	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
48	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
49	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
50	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
51	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
52	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
53	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
54	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
55	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
56	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
57	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
58	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
59	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
60	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
61	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
62	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
63	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
64	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
65	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
66	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
67	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
68	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
69	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
70	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
71	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
72	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
73	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
74	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
75	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
76	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
77	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
78	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
79	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
80	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
81	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
82	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
83	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
84	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
85	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
86	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
87	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
88	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
89	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
90	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
91	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
92	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
93	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
94	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
95	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
96	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
97	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
98	風を毒す其れ……之は御母さんの胎毒で	其れ	なら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母は若い時分
99	さえ有つた。祖母は若い時分所吉跡を見	祖母	物に出で草津の事は教えて呉れる人より詳しく
100	知つて居たので其の都度「御金がありま	人	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母
101	せう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と	母	は折々母に「○の顔を見よあれを 氣付かぬか」と驚く云う……顔の水腫と云い眉毛の薄
102	くは「何んの病いだらうを御氣の毒すね	胎毒	さんの胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つ
103	胎毒でせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒	人	てせう其れなら草津に行 けば直ぐ癒る」と色々功能迄教えて呉れる人さえ有つた。祖母

104	や	女	子の細き腕に於てをやだ。今から見れば何物も安價の明治三十年頃とは云え家賃五圓
105	晝間五銭、石油一罐晝間六七拾銭の北海道で	祖母	は家庭の不 満より毎日仕出し屋より數奇な物を喰て来る。家政は亂るゝばかり、母は益
106	録、石油一罐晝間六七拾銭の北海道で祖母は	家庭	の不満より毎日仕出し屋より數奇な物を喰て来る。家政は亂るゝばかり、母は益々不安
107	數奇な物を喰て来る。家政は亂るゝばかり、	母	は益々不安と恐怖を感じ苦しい中にも下女も夫をも其他總てを勞つたが一人の弟を奉公
108	しし中にも	下女	も夫をも其他總てを勞つたが一人の弟を奉公に出さねばならぬと語つた。祖母は之れに
109	にも下女も夫をも其他總てを勞つたが一人の	弟	を奉公に出さねばならぬと語つた。祖母は之れ には反對であつた。其他何にか故障が起
110	一人の弟を奉公に出さねばならぬと語つた。	祖母	は之れ には反對であつた。其他何にか故障が起る。益々家庭は亂れて興波の絶え間は
111	對であつた。其他何にか故障が起る。益々	家庭	は亂れて興波の絶え間はなかつた。嗚呼此の 恐ろしき家内の動亂は諸君は之を何と考へ
112	恐ろしき	家内	の動亂は諸君は之を何と考へられるか。互に憎み合ひ憎み合ひ兎角來客に對して思わ
113	恐ろしき家内の動亂は	諸君	は之を何と考へられるか。互に憎み合ひ憎み合ひ兎角來客に對して思わす 粗略になつ
114	家内の動亂は諸君は之を何と考へられるか。	互に	憎み合ひ憎み合ひ兎角來客に對して思わす 粗略になつた。氣丈な母もやけになつた。
115	考へられるか。互に憎み合ひ憎み合ひ兎角	來客	に對して思わす 粗略になつた。氣丈な母もやけになつた。 御座敷も出ずして家の瓦解
116	粗略になつた。氣丈な	母	もやけになつた。 御座敷も出ずして家の瓦解せんとする時語あつて之れを 助けると云ふ
117	丈な母もやけになつた。 御座敷も出ずして	家	の瓦解せんとする時語あつて之れを 助けると云ふ人無かつた。 慈みの神は既に逃げ去つ
118	助ける と云ふ	人	無かつた。 慈みの神は既に逃げ去つたのであらう。伯母は始めの内こそ母と共に家 政を
119	助けると云ふ人無かつた。 慈みの	神	は既に逃げ去つたのであらう。伯母は始めの内こそ母と共に家 政を助けて孝道を盡して居
120	た。 慈みの神は既に逃げ去つたのであらう。	伯母	は始めの内こそ母と共に家 政を助けて孝道を盡して居たが祖母の行跡に付てつくゝ愛
121	逃げ去つたのであらう。伯母は始めの内こそ	祖母	と共に家政を助けて孝道を盡して居たが祖母の行跡に付てつくゝ愛想を盡し何處とも無
122	政を助けて孝道を盡して居たが	祖母	の行跡に付てつくゝ愛想を盡し何處とも無き愛を盡まして仕舞つた。いくら尋ねても
123	つた。いくら尋ねても皆目知れなかつた。	△△	某も何某も更に来なかつた。嗚呼世は暗黒恰も太陽の 西に入つたと同じであつた。
124	た。いくら尋ねても皆目知れなかつた。△△	某	も何某も更に来なかつた。嗚呼世は暗黒恰も太陽の 西に入つたと同じであつた。最早
125	くら尋ねても皆目知れなかつた。△△某も何	某	も更に来なかつた。嗚呼世は暗黒恰も太陽の 西に入つたと同じであつた。最早朝可
126	つた。△△某も何某も更に来なかつた。嗚呼	世	は暗黒恰も太陽の 西に入つたと同じであつた。最早朝可き人もなく世間の同情も全
127	山に入つたと同じであつた。最早朝可き	人	もなく世間の同情も全く絶えたので母は眞から神に 祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而
128	たと同じであつた。最早朝可き人もなく	世間	の同情も全く絶えたので母は眞から神に 祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而し神わ此
129	る可き人もなく世間の同情も全く絶えたので	母	は眞から神に 祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而し神わ此時眼を閉じて居たのであら
130	なく世間の同情も全く絶えたので母は眞から	神	に 祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而し神わ此時眼を閉じて居たのであらをか、耳を塞
131	祈つた。	私	の爲に、熱心に祈つた。而し神わ此時眼を閉じて居たのであらをか、耳を塞いで居たので
132	祈つた。私の爲に、熱心に祈つた。而し	神	わ此時眼を閉じて居たのであらをか、耳を塞いで居たので であらうか、但しは留守であらう
133	あらうか、但しは留守であらうか、將又	母	の熱心が足らぬのか、愈々母は絶望して仕舞つた。草津に 御やをやらなければなま
134	あらうか、將又母の熱心が足らぬのか、愈々	母	は絶望して仕舞つた。草津に 御やをやらなければなまとい直ぐ金子の才覚に取りか
135	で産の難	病	が癒るものでないと言てわが心に細い話だ。衣類や帶指輪等も入置した。誰々の借財も
136	滞り難となつた。斯かる場合に至つても	祖母	は飽く迄強慾の人だけに、何一つ自分の品を手離さなかつた。況んや所持金をやだ。而
137	。斯かる場合に至つても祖母は飽く迄強慾の	人	だけに、何一つ自分の品を手離さなかつた。況んや所持金をやだ。而も高利を貸す程の財
138	つても祖母は飽く迄強慾の人だけに、何一つ	自分	の品を手離さなかつた。況んや所持金をやだ。而も高利を貸す程の財を以て尚金銭は他
139	やだ。而も高利を貸す程の財を以て尚金銭は	他人	と同様考で、一更冷淡に構えて居る。殘忍とも極惡とも人非人とも云ひ度い位だ。三
140	て居る。殘忍とも極惡とも	人非人	とも云ひ度い位だ。三井岩崎の富は何程あれ共自分の爲には何の役 には立たん。我等
141	殘忍とも極惡とも人非人とも云ひ度い位だ。	三井岩崎	の富は何程あれ共自分の爲には何の役 には立たん。我等親子は神佛の加護も失せた
142	も云ひ度い位だ。三井岩崎の富は何程あれ共	自分	の爲には何の役 には立たん。我等親子は神佛の加護も失せたのか。天を恨み地を恨み世
143	には立たん。	我等親子	は神佛の加護も失せたのか。天を恨み地を恨み世をも人も呪ひ尚富者をも呪ひ 暮
144	には立たん。我等親子は	神佛	の加護も失せたのか。天を恨み地を恨み世をも人も呪ひ尚富者をも呪ひ 暮した。此の
145	神佛の加護も失せたのか。天を恨み地を恨み	世	をも人も呪ひ尚富者をも呪ひ 暮した。此の不幸なる母は私に向つて云ふに「親に孝行
146	加護も失せたのか。天を恨み地を恨み世をも	人	をも呪ひ尚富者をも呪ひ 暮した。此の不幸なる母は私に向つて云ふに「親に孝行しよ
147	のか。天を恨み地を恨み世をも人も呪ひ尚	富者	をも呪ひ 暮した。此の不幸なる母は私に向つて云ふに「親に孝行しよ
148	ひ暮した。此の不幸なる母は	母	は私に向つて云ふに「親に孝行しよ
149	ひ暮した。此の不幸なる母は	私	に向つて云ふに「親に孝行しよ
150	た。此の不幸なる母は私に向つて云ふに「	親	に孝行しよ
151	つて云ふに「親に孝行しよう	母	を呼び寄せてこん な苦勞をさす積りでなかつたのに、せめて
152	な苦勞をさす積りでなかつたのに、せめて	祖父	さんが御存命であるなら私達も是程迄零落もすまい ものを」と平素斯る感傷を云つた。
153	たのに、せめて祖父さんが御存命であるなら	私達	も是程迄零落もすまい ものを」と平素斯る感傷を云つた。「頼みと思ふ祖父さんは早く
154	を」と平素斯る感傷を云つた。「頼みと思ふ	祖父	さんは早く死んで鬼の様な御婆様んが長生して其 云つたは病氣に罹つて私も御前でも無
155	「頼みと思ふ祖父さんは早く死んで鬼の様な	御婆様ん	が長生して其 云つたは病氣に罹つて私も御前でも無かつたらなくと此處を逃げて
156	は病氣に罹つて私も御前でも無かつたらなく	御前	に罹つて私も御前でも無かつたらなくと此處を逃げて仕舞つたよ。一層
157	上御前は	病氣	に罹つて私も御前でも無かつたらなくと此處を逃げて仕舞つたよ。一層の事一思ひ
158	上御前は病氣に罹つて	私	も御前でも無かつたらなくと此處を逃げて仕舞つたよ。一層の事一思ひ に御前を殺し
159	上御前は病氣に罹つて私も	御前	でも無かつたらなくと此處を逃げて仕舞つたよ。一層の事一思ひ に御前を殺して其
160	よう	親	に孝行しよう
161	い事。	私	は母に云われる度び子供にも如何に情けなかつたか知れない。私は將來の爲にも一家の
162	い事、私は	母	に云われる度び子供にも如何に情けなかつたか知れない。私は將來の爲にも一家の爲 に
163	い事、私は母に云われる度び	子供	心にも如何に情けなかつたか知れない。私は將來の爲にも一家の爲 に
164	子供心にも如何に情けなかつたか知れない。	私	は將來の爲にも一家の爲 に
165	情けなかつたか知れない。私は將來の爲にも	一家	の爲にも一層死んで災いの根を切らう。武士の血を穢した此の病、俺
166	にも一層死んで災いの根を切らう。	武士	の爲にも一層死んで災いの根を切らう。武士の血を穢した此の病、俺の敵だ。よし俺は
167	で災いの根を切らう。武士の血を穢した此の	病	の敵だ。よし俺は死んで見せんと疊を 蹴て奥入り疊を裏返し
168	の根を切らう。武士の血を穢した此の病、	俺	の敵だ。よし俺は死んで見せんと疊を 蹴て奥入り疊を裏返し
169	蹴て奥入り疊を裏返し	先祖	傳來の小瓶(ソウ)の鞘を掛つた刹那、猫は飛び付きて私を慰むるが 如く一聲喚いた。抑
170	顔(ソウ)の鞘を掛つた刹那、猫は飛び付きて	私	を慰むるが 如く一聲喚いた。押せ共退け共去らず。爲に自分の手は鈍つた。嗚呼思えば如
171	よく一聲喚いた。押せ共退け共去らず。爲に	自分	の手は鈍つた。嗚呼思えば如何に自分は薄志弱行で あるか、是程の苦痛と將來の身の上
172	爲に自分の手は鈍つた。嗚呼思えば如何に	自分	は薄志弱行で あるか、是程の苦痛と將來の身の上を案じて一旦死と決して此の僅備一
173	あるか、是程の苦痛と將來の	身	の上を案じて一旦死と決して此の僅備一定の愛に溺れて死を思い留 まるとは嗚呼不甲斐
174	まるとは嗚呼不甲斐なき	者	よ。

図表 8

各図表番号	先行文脈	キーワード	後続文脈
1		讀	
2	左れば今其概略を少しく語らざばならん。	私	は此處に至つて聊か不要を控くであらう。左れば今其概略を少しく語らざばならん。
3	左れば今其概略を少しく語らざばならん。私の	祖父	の祖父は松前の藩士にして相當の地位に居りしも星移り物變り王政復古と共に廢藩置縣の
4	は松前の	藩士	は松前の藩士にして相當の地位に居りしも星移り物變り王政復古と共に廢藩置縣の制と
5	士の狼狽一方ならず、	書家	にして相當の地位に居りしも星移り物變り王政復古と共に廢藩置縣の制となり或高潔
6	士の狼狽一方ならず。書家となり、	巡査	となり、巡査となり、或は車夫と迄に零落する者もあつた。而して糧を得るのに汲々と
7	一方ならず、書家となり、巡査となり、或は	車夫	と迄に零落する者もあつた。而して糧を得るのに汲々として其の業に従事した。祖父は
8	なり、巡査となり、或は車夫と迄に零落する	者	もあつた。而して糧を得るのに汲々として其の業に従事した。祖父は世才に富める人であ
9	るのに汲々として其の業に従事した。	祖父	は世才に富める人であつただけに直ちに資産放棄を營んだ 傍ら第三消防組を設立して
10	して其の業に従事した。祖父は世才に富める	人	であつただけに直ちに資産放棄を營んだ 傍ら第三消防組を設立して 大に士氣を振つた
11	傍ら第三部	消防組	を設立して 大に士氣を振つた。或時わ町に幾輪かの新宅を設け之れを官に献納し
12	た。或時わ町に幾輪かの新宅を設け之れを	官	に献納した。故に何町の○○と云えば可なり知られた顔役であつた。又土蔵も貸家もあつ
13	した 故に何町の	○○	と云えば可なり知られた顔役であつた。又土蔵も貸家もあつた。財産家と云譯でもない
14	た 故に何町の○○と云えば可なり知られた	顔役	であつた。又土蔵も貸家もあつた。財産家と云譯でもないが信用に置いてはより以上の勢
15	れた顔役であつた。又土蔵も貸家もあつた。	財産家	と云譯でもないが信用に置いてはより以上の勢力で何か付けてよく口を開た。其筋から
16	より以上の勢力で何か付けてよく口を開た。	其筋	から何々何々品迄も御下付された。故に營業に繁昌した。明治二十一年祖父は七
17	明治二十一年	祖父	は七十三歳を一期として此世を去つた……。土臺石なくして其の家を支へ得んや、加
18	て此世を去つた……。土臺石なくして其の	家	を支へ得んや、加之文明の移り變りは此の城山一萬戸以上の城下を不用にせしめた。故に
19	上の城下を不用にせしめた。故に他國に移る	者	、家を賣む者等日に淋びれる計り、自分の家が下宿屋と變る迄には種々の
20	る	者	、家を賣む者等日に淋びれる計り、自分の家が下宿屋と變る迄には種々の話もあるが今
21	じる者、家を賣む者等日に淋びれる計り、	自分	の家が下宿屋と變る迄には種々の話もあるが今突れを 略す……祖父無き後は祖母が代は
22	略す……	祖父	無き後は祖母が代はつた。世間の批評と攻撃的の的と成た。女將は幾多の艱難と戦つた
23	略す……祖父無き後は	祖母	が代はつた。世間の批評と攻撃的の的と成た。女將は幾多の艱難と戦つた が親戚某の助に
24	略す……祖父無き後は祖母が代はつた。	世間	の批評と攻撃的の的と成た。女將は幾多の艱難と戦つた が親戚某の助に依つて辛くも月日
25	が代はつた。世間の批評と攻撃的の的と成た。	女將	は幾多の艱難と戦つた が親戚某の助に依つて辛くも月日を送つた。それで祖母の素性に
26	が親戚	某	の助に依つて辛くも月日を送つた。それで祖母の素性に付ても一言の要あり。妻々様は仙
27	某の助に依つて辛くも月日を送つた。それで	祖母	の素性に付ても一言の要あり。妻々様は仙臺石の巻の豪家の娘で若き時栞葉公に御殿女
28	それで祖母の素性に付ても一言の要あり。	妻々様	は仙臺石の巻の豪家の娘で若き時栞葉公に御殿女中として仕え、後中老となり松前に
29	それ 石の巻の豪家の娘で若き時栞葉公に	御殿女中	として仕え、後中老となり松前に渡りて○○家の後妻として來りし者と聞く。維新
30	娘で若き時栞葉公に御殿女中として仕え、後	中老	となり松前に渡りて○○家の後妻として來りし者と聞く。維新當時祖父城詰となりし時
31	て仕え、後中老となり松前に渡りて○○家の	後妻	として來りし者と聞く。維新當時祖父城詰となりし時祖母は専ら女主人として家事に心
32	して來りし者と聞く。維新當時	祖父	城詰となりし時祖母は専ら女主人として家事に心を砕き當城主 本公司も御實習遊ばさ
33	りし者と聞く。維新當時祖父城詰となりし時	祖母	は専ら女主人として家事に心を砕き當城主 本公司も御實習遊ばされしと云う。其他種
34	く。維新當時祖父城詰となりし時祖母は専ら	女主人	として家事に心を砕き當城主 本公司も御實習遊ばされしと云う。其他種々の珍らし
35	と云う。其他種々の珍らしき逸話もあつた、	人	是れを鬼女とも呼んだと。 管 官及び官吏の下宿として高評を博したるも明治三十年遂に業
36	其他種々の珍らしき逸話もあつた、	鬼女	とも呼んだと。 管 官及び官吏の下宿として高評を博したるも明治三十年遂に業を廢し諸
37	官及び	官	史の下宿として高評を博したるも明治三十年遂に業を廢し諸館に移る事になつた。○○の
38	官及び	官吏	の下宿として高評を博したるも明治三十年遂に業を廢し諸館に移る事になつた。○○の
39	遂に業を廢し諸館に移る事になつた。○○の	家	には御買子があつた。故に先き述べる母や母の妹は皆買子である。 一時は可なり大勢の
40	は	嗣子	があつた。故に先き述べる母や母の妹は皆買子である。 一時は可なり大勢の家
41	は嗣子があつた。故に先き述べる母や母の	妹	は皆買子である。 一時は可なり大勢の家族になつたが 多くの養女達は祖父亡つた後は逃
42	子があつた。故に先き述べる母や母の妹は	皆	買子である。 一時は可なり大勢の家族になつたが 多くの養女達は祖父亡つた後は逃して
43	があつた。故に先き述べる母や母の妹は皆	買子	である。 一時は可なり大勢の家族になつたが 多くの養女達は祖父亡つた後は逃して
44	の妹は皆買子である。 一時は可なり大勢の	家族	になつたが 多くの養女達は祖父亡つた後は逃して其の所在も判らず皆思ひ・に影を
45	多くの	養女	達は祖父亡つた後は逃して其の所在も判らず皆思ひ・に影を翳まして残る三人の娘
46	多くの養女達は	祖父	亡つた後は逃して其の所在も判らず皆思ひ・に影を翳まして残る三人の娘を 前に云
47	は祖父亡つた後は逃して其の所在も判らず	皆	思ひ・に影を翳まして残る三人の娘を 前に云つた通り娘と 母とを 前に云つた通り娘と
48	通り皆思ひ・に影を翳まして残る三人の	娘	と 母とを 前に云つた通り娘と 母とを 前に云つた通り娘と 母とを 前に云つた通り
49	前に云つた通り	娘	と 母とを 前に云つた通り娘と 母とを 前に云つた通り娘と 母とを 前に云つた通り
50	前に云つた通り	祖母	との奸計に依つて旅藝者となした。次女に付ては此處に云う用なし。私の伯 母と呼び
51	前に云つた通り某と祖母との奸計に依つて	旅藝者	となした。次女に付ては此處に云う用なし。私の伯 母と呼びは三女のきみ子の事で
52	某と祖母との奸計に依つて旅藝者となした。	次女	に付ては此處に云う用なし。私の伯 母と呼びは三女のきみ子の事で此きみ子こそ今
53	となした。次女に付ては此處に云う用なし。	私	の伯母と呼びは三女のきみ子の事で此きみ子こそ今に行衛が知れない。長女のみつ子は
54	母と呼びは	三女	のきみ子の事で此きみ子こそ今に行衛が知れない。長女のみつ子は十二歳にして先 妻某
55	母と呼びしは三女のきみ子の事で此	きみ子	こそ今に行衛が知れない。長女のみつ子は十二歳にして先 妻某の養女となり祖父と彼
56	子の事で此きみ子こそ今に行衛が知れない。	長女	のみつ子は十二歳にして先 妻某の養女となり祖父と彼とに寵を受くる事厚く蝶よ花よと
57	妻某の養女となり	祖父	と彼とに寵を受くる事厚く蝶よ花よと愛せられた。故に裁縫に遊藝に習いし物を 後妻に
58	妻某の養女となり祖父と	彼	とに寵を受くる事厚く蝶よ花よと愛せられた。故に裁縫に遊藝に習いし物を 後妻になつ
59	を	後妻	になつてからは依然の寵は地に落ち母の云う事をさへ怒つて今 繼子扱で戦々競々
60	の寵は地に落ち母の云う事をさへ怒つて全く	繼子	扱で戦々競々として娘心 其苦を洩すこともあつた。母は私の父の外に今一人の孝主が
61	事をさへ怒つて全く繼子扱で戦々競々として	娘	心 其苦を洩すこともあつた。母は私の父の外に今一人の孝主が在つた。□□某と云う畫
62	事をさへ怒つて全く繼子扱で戦々競々として	娘	心 其苦を洩すこともあつた。母は私の父の外に今一人の孝主が在つた。□□某と云う畫
63	に其苦を洩すこともあつた。母は	私	の父の外に今一人の孝主が在つた。□□某と云う畫家で祖母の行 跡の面白くないのを嘆
64	に其苦を洩すこともあつた。母は私の	父	の外に今一人の孝主が在つた。□□某と云う畫家で祖母の行 跡の面白くないのを嘆り一年
65	こそあつた。母は私の父の外に今一人の	孝主	が在つた。□□某と云う畫家で祖母の行 跡の面白くないのを嘆り一年餘りにして合意の
66	は私の父の外に今一人の孝主が在つた。□□	某	と云う畫家で祖母の行跡の面白くないのを嘆り一年餘りにして合意の上別れた。私の弟と
67	の外に今一人の孝主が在つた。□□某と云う	畫家	で祖母の行跡の面白くないのを嘆り一年餘りにして合意の上別れた。私の弟と呼ぶは其
68	今一人の孝主が在つた。□□某と云う畫家で	祖母	の行跡の面白くないのを嘆り一年餘りにして合意の上別れた。私の弟と呼ぶは其子であ
69	いのを嘆り一年餘りにして合意の上別れた。	私	の弟と呼ぶは其子である。… 此項 二度迄も武士の娘孝行藝者と題して函館新聞に掲げ
70	のを嘆り一年餘りにして合意の上別れた。私の	弟	と呼ぶは其子である。… 此項 二度迄も武士の娘孝行藝者と題して函館新聞に掲げられ
71	餘りにして合意の上別れた。私の弟と呼ぶは	其子	である。… 此項 二度迄も武士の娘孝行藝者と題して函館新聞に掲げられた。御ひき
72	度迄も武士の	娘	孝行藝者と題して函館新聞に掲げられた。御ひき諸君の同情に依つて一家の物は露 命を
73	度迄も武士の娘	孝行藝者	と題して函館新聞に掲げられた。御ひき諸君の同情に依つて一家の物は露 命を驚
74	娘孝行藝者と題して函館新聞に掲げられた。	御ひき諸君	の同情に依つて一家の物は露 命を驚いた。之に依つて大方○○家の大略を知る
75	に掲げられた。御ひき諸君の同情に依つて	一家	の物は露 命を驚いた。之に依つて大方○○家の大略を知る事と思ふ。又話は元元戻りて
76	命を驚いた。之に依つて大方	○○家	の大略を知る事と思ふ。又話は元元戻りて母と祖母とは犬猿も只 ならず寄ると觸る
77	大略を知る事と思ふ。又話は元元戻りて母と	祖母	とは犬猿も只 ならず寄ると觸ると触合つた。 日露の國交は断絶した。弟の父
78	日露の國交は断絶した。	弟	の父○○は祖母に向つて弟を養子に運ると云つた。これは裏に默契があるの極め其の密

79	日露の國交は断絶した。弟の	父	〇〇は祖母に向つて弟を養子に連れて云つた。これは裏に黙契がある ので豫め其の密約を
80	日露の國交は断絶した。弟の父	〇〇	は祖母に向つて弟を養子に連れて云つた。これは裏に黙契がある ので豫め其の密約を仄
81	日露の國交は断絶した。弟の父〇〇は	祖母	に向つて弟を養子に連れて云つた。これは裏に黙契がある ので豫め其の密約を仄めかす
82	國交は断絶した。弟の父〇〇は祖母に向つて	弟	を養子に連れて云つた。これは裏に黙契がある ので豫め其の密約を仄めかす要々は非常に
83	断絶した。弟の父〇〇は祖母に向つて弟を	養子	に連れて云つた。これは裏に黙契がある ので豫め其の密約を仄めかす要々は非常に怒つ
84	るので豫め其の密約を仄めかす	妻々	は非常に怒つた。「馬鹿め、今此の弟を他家へ出したなら家は断絶 する。〇の様な不具
85	其の密約を仄めかす妻々は非常に怒つた。「	馬鹿	め、今此の弟を他家へ出したなら家は断絶 する。〇の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来る
86	かす妻々は非常に怒つた。「馬鹿め、今此の	弟	を他家へ出したなら家は断絶 する。〇の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」
87	なさらぬは非常に怒つた。「馬鹿め、今此の弟を	他家	へ出したなら家は断絶 する。〇の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」母は
88	た。「馬鹿め、今此の弟を他家へ出したなら	家	は断絶 する。〇の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」母は尚負けずに云つた
89	する。	〇	の様な不具者で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」母は尚負けずに云つたけれ共御母さ
90	する。〇の様な	不具者	で後を嗣ぐ事が出来ると思うか!!!」母は尚負けずに云つたけれ共御母さん今此 處で
91	と思うか!!!」母は尚負けずに云つたけれ共	御母さん	今此 處で一人でも口が減つたなら大變樂ではありませんか。其れに他人へ連れてはなしそんなに御
92	處で	一人	でも口が減つたなら大變樂ではありませんか。其れに他人へ連れてはなしそんなに御
93	減つたなら大變樂ではありませんか。其れに	他人	え連れてはなしそんなに御腹立ち なさらぬでも宜いじゃありませんか」。祖母は愈々
94	なさらぬでも宜いじゃありませんか」。	祖母	は愈々言葉を荒立つて連れらぬと云ふので宜いじゃありませんか。今ヶ月の
95	の勝利に歸した。今ヶ月の争を書き置く。	祖母	は曰く「〇は汚れた病によつて長男を廃嫡せねばなら ぬ。若し弟を養子に連れて〇〇
96	た。今ヶ月の争を書き置く。祖母は曰く「	〇	は汚れた病によつて長男を廃嫡せねばなら ぬ。若し弟を養子に連れて〇〇の家は誰が再
97	棄つ。祖母は曰く「〇は汚れた病によつて	長男	を廃嫡せねばなら ぬ。若し弟を養子に連れて〇〇の家は誰が再興するか。家は断絶して
98	らん。若し	弟	を養子に連れて〇〇の家は誰が再興するか。家は断絶して先祖に對して申譯がない。腐つ
99	らん。若し弟を	養子	に連れて〇〇の家は誰が再興するか。家は断絶して先祖に對して申譯がない。腐つ た
100	らん。若し弟を養子に連れて	〇〇の家	は誰が再興するか。家は断絶して先祖に對して申譯がない。腐つ た仲は何の要はない
101	らん。若し弟を養子に連れて〇〇の家は	誰	が再興するか。家は断絶して先祖に對して申譯がない。腐つ た仲は何の要はない。尊い者
102	を養子に連れて〇〇の家は誰が再興するか。	誰	は断絶して先祖に對して申譯がない。腐つ た仲は何の要はない。尊い者は健康の第一人で
103		仲	は何の要はない。尊い者は健康の第一人である」と、母は「系圖も大切である。弟も無
104	つた仲は何の要はない。尊い	者	は健康の第一人である」と、母は「系圖も大切である。弟も無無論大切であるが病む者をば
105	つた仲は何の要はない。尊い	者	は健康の第一人である」と、母は「系圖も大切である。弟も無無論大切であるが病む者をば
106	尊い者は健康の第一人である」と、母は「	系圖	も大切である。弟も無無論大切であるが病む者をば親に非らずして誰が見て呉れる人あり
107	一人である」と、母は「系圖も大切である。	弟	も無無論大切であるが病む者をば親に非らずして誰が見て呉れる人ありや。健康なる弟は探
108	あるが病む	者	をば親に非らずして誰が見て呉れる人ありや。健康なる弟は探で置ても誰か拾ひ揚げて 呉
109	あるが病む者をば親に非らずして	誰	が見て呉れる人ありや。健康なる弟は探で置ても誰か拾ひ揚げて 呉れる」と、ヶ月共是
110	が病む者をば親に非らずして誰が見て呉れる	人	ありや。健康なる弟は探で置ても誰か拾ひ揚げて 呉れる」と、ヶ月共是と非を判ち難い
111	らずして誰が見て呉れる人ありや。健康なる	弟	は探で置ても誰か拾ひ揚げて 呉れる」と、ヶ月共是と非を判ち難い。 私は勿論母を
112	で呉れる人ありや。健康なる弟は探で置ても	誰	か拾ひ揚げて 呉れる」と、ヶ月共是と非を判ち難い。 私は勿論母を有難く感ぜずに
113		私	は勿論母を有難く感ぜずに居られぬ。此の論が原因となつて一家は遂に四難滅裂と
114	感ぜずに居られぬ。此の論が原因となつて	一家	は遂に四難滅裂となつた……弟は〇〇家の人と成た……祖母は之が動機となつて自
115	…	弟	は〇〇家の人と成た……祖母は之が動機となつて自分の財産を取継め故郷へ歸る
116	…弟は〇〇	人	の人と成た……祖母は之が動機となつて自分の財産を取継め故郷へ歸るく縁家某え引
117	…弟は〇〇家の	人	と成た……祖母は之が動機となつて自分の財産を取継め故郷へ歸るく縁家某え引移つ
118	…弟は〇〇家の人となつた……	祖母	は之が動機となつて自分の財産を取継め故郷へ歸るく縁家某え引移つた。私は當分母
119	家の人となつた……祖母は之が動機となつて	自分	の財産を取継め故郷へ歸るく縁家某え引移つた。私は當分母と此處に住んで居た。
120	となつて自分の財産を取継め故郷へ歸るく	縁家	某え引移つた。私は當分母と此處に住んで居た。
121	つて自分の財産を取継め故郷へ歸るく縁家	某	え引移つた。私は當分母と此處に住んで居た。
122	引移つた。	私	は當分母と此處に住んで居た。

図表 9

各図表番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	家の没落と共に	私	は僅かの旅費をもつて便船を求めて青森に渡つた。津輕の唐子温泉に行かん爲であつた。
2	あつた。船中にて同情厚き天理教の	布教師	に彼是れと問ひつ語り自分病氣に同情して遂に壱口から三十錢を出して酔子でも
3	厚き天理教の布教師に彼是れと問ひつ語り	自分	の病氣に同情して遂に壱口から三十錢を出して酔子でも買いなさいと詫げる様にして渡
4	理教の布教師に彼是れと問ひつ語り自分の	病氣	に同情して遂に壱口から三十錢を出して酔子でも買いなさいと詫げる様にして渡して呉
5	いと詫げる様にして渡して呉れた。其して	私	は東川町一八二天 理教會何の誰と妻の外娘達が居ります。君が若し面館え歸つた時は尊
6	理教會何の	誰	と妻の外娘達が居ります。君が若し面館え歸つた時は尊ねて行き給え。君一人位何と か
7	理教會何の誰と妻の外娘達が居ります。	君	が若し面館え歸つた時は尊ねて行き給え。君一人位何と かして御世話して下さいませ
8	に着くと間もなく上野行きに汽車に	二人	は乗つた。惜しい別れをして自分一人下車して唐子に向つた。自分を下した汽車は黒煙
9	きの汽車に二人は乗つた。惜しい別れをして	自分	一人下車して唐子に向つた。自分を下した汽車は黒煙を吐いて東へと霧連した唐子
10	唐子に着た時は日暮れ方であつた。	家	に立登る夕餉の仕度の煙でもあらう。私は或温泉宿の前立つて 宿を乞うた。家の者は私
11	で草家に立登る夕餉の仕度の煙でもあらう。	私	は或温泉宿の前立つて 宿を乞うた。家の者は私の顔を見ると一も二もなく拒絶された、
12	宿を乞うた。	家の者	は私の顔を見ると一も二もなく拒絶された、胸から隣に二三軒悉く拒絶された。私は逆傍
13	宿を乞うた。家の者は	私	の顔を見ると一も二もなく拒絶された、胸から隣に二三軒悉く拒絶された。私は逆傍の松
14		私	は逆傍の松の根に腰を卸して腕を拱いて考へた。室は未だ夕餉の色消え失せぬに
15	しく宿るに家無き	自分	は益々暗黒の世界に落ち行く様なきさと寂寥を感じた。恐れ多くも、後藤 嗣帝御製
16	藤とて立ちよれば又抽簫らす松の下露」と。	自分	も黙して居ると何處ともなく死ぬ」と惡魔の囁き、前には大きな川があり水田には蛙
17	ともなく死ぬ」と	惡魔	の囁き、前には大きな川があり水田には蛙が驚るが如くに…… 宣し此川へと思へば先
18	と思へば先より二人の	男	が私を見付けて「誰だい」、「はい」と答へて聞かぬへ儘に答へた。可愛想にと私は云ふ
19	と思へば先より二人の男が	誰	を見付けて「誰だい」、「はい」と答へて聞かぬへ儘に答へた。可愛想にと私は云ふが儘
20	と思へば先より二人の男が私を見付けて「	私	だい」、「はい」と答へて聞かぬへ儘に答へた。可愛想にと私は云ふが儘に行くを越
21	にと	私	は云ふが儘に行くを越して木賃宿の札が見えた。一人の男は先に這入つた。絶切れ
22	くと橋を越して木賃宿の札が見えた。一人の	男	は先に這入つた。絶切れ・に 聞く處は病人だからとめて呉れと云ふのだ。嫌ない其人な
23	聞く處は	私	だからとめて呉れと云ふのだ。嫌ない其人な位なら籠板を外せ。纏て男は来て「漸く御
24	のだ。嫌ない其人な位なら籠板を外せ、纏て	男	は来て「漸く御 前を泊める事にした。安心して泊まんなさい又來るよ」と立ち去つた。男
25	して泊まんなさい又來るよ」と立ち去つた。	男	は土地の若衆であつた。私は御蔭で二ヶ月前所に居たが山中の事とて七圓の消費も毎日
26	さい又來るよ」と立ち去つた。男達は土地の	若衆	であつた。私は御蔭で二ヶ月前所に居たが山中の事とて七圓の消費も毎日美味と思つて
27	の效能は梅毒によいと	私	も多少効があつたかとも思つたが僅かの争から此家を立てたので折角の治療 も水の泡……
28	少効があつたかとも思つたが僅かの争から此	家	を立てたので折角の治療 も水の泡……又川部驛で東車する都合の處断られたので重足
29	より汽笛を鳴らして汽車は進んで來た。	私	は其の瞬間の狼狽は知らぬ事に到る十分の位置に書 き得ない。此の絶體絶命何と分別す
30	な迫つて來る。漸く軀け込んだ時は汽車中の	人	は皆見 て居つた。是程宜い死ぬ機會に遇つた時に尚生を惜むか自らを笑ひ又何如にも業病
31	つて來る。漸く軀け込んだ時は汽車中の人は	皆	見 て居つた。是程宜い死ぬ機會に遇つた時に尚生を惜むか自らを笑ひ又何如にも業病だ
32	是程宜い死ぬ機會に遇つた時に尚生を惜むかと	自ら	を笑ひ又何如にも業病だとも深く感じた。死ぬと云ふは誰でも結して宜いものでは無い

33	た仰に尚生を借むかと自らを笑い又何如にも	衆病	だとも深く感じた。死ぬと云ふは誰でも結して宜いものではない。然るに日々の新聞は
34	た。死ぬと云ふは	誰	でも結して宜いものではない。然るに日々の新聞は自殺、投身其他を報じて居るは正しく
35	は正しく或物の誘惑であらう。	私	が青森驛に着く時には舉動不審と見られて憲兵巡査に調べられた。私が病氣を隠す爲に帽
36	私が青森驛に着く時には舉動不審と見られて	憲兵巡査	に調べられた。私が病氣を隠す爲に帽子裏面に色眼鏡をかけて居たのですりと見た
37	私が	私	を隠す爲に帽子裏面に色眼鏡をかけて居たのですりと見た。連絡船は明
38	深く経験した。零落れて袖に涙のかかる時	人	の情の奥ぞ知らる。……宿もなく私が徘徊するを見て或一家の同情に依つて雨露を凌
39	らる。……宿もなく	私	が徘徊するを見て或一家の妻の同情に依つて雨露を凌ぐ事が出来た。暖かい飯と鹽焼の鱈
40	……宿もなく私が徘徊するを見て或一家の	妻	の同情に依つて雨露を凌ぐ事が出来た。暖かい飯と鹽焼の鱈とは玉子焼以上の美味で夜の
41	乗つても故郷の	家	の模様と昨夜の情け深い人妻の顔が舞臺として先を見、後を見て夢の様に港に上がつた
42	がつた。相生町の	家	は貸家の札が貼られて居るの隣家の人に聞くと鶴岡町向番地と俵を飛ばした。母は私を
43	母は私を見て非常に立腹した。「御前の	私	を見て非常に立腹した。「御前の病氣を癒す可く今金の才覚中であるのに歸宅すると
44	母は私を見て非常に立腹した。「	御前	の病氣を癒す可く今金の才覚中であるのに歸宅するととは怒を知らん。親不孝者奴」と云
45	母は私を見て非常に立腹した。「御前の	病氣	を癒す可く今金の才覚中であるのに歸宅するととは怒を知らん。親不孝者奴」と云はれて
46	ん。	親不孝者奴	」と云はれて見るといくら私でも是の語に一言半句も返す言葉は出なかつた。
47	ん。親不孝者奴」と云はれて見るといくら	私	でも是の語に一言半句も返す言葉は出なかつた。當分の内此處の二階を借りる事にしたが
48	内此處の二階を借りる事にしたが	亭主	の言うのに「貴方は晝の内は往來の方へ顔を出さない様にして下さいと御承知の通り私
49	の二階を借りる事にしたが亭主の言うのに「	貴方	は晝の内は往來の方へ顔を出さない様にして下さいと御承知の通り私の家は水菓子屋で
50	事にしたが亭主の言うのに「貴方は晝の内は	往來	の方へ顔を出さない様にして下さいと御承知の通り私の家は水菓子屋で營業の妨げに成
51	下さいと御承知の通り	私	の家は水菓子屋で營業の妨げに成るから」と。私も初めの内は我慢したが遂には障子を閉
52	下さいと御承知の通り私の	家	は水菓子屋で營業の妨げに成るから」と。私も初めの内は我慢したが遂には障子を閉
53	家は水菓子屋で營業の妨げに成るから」と。	小供	も初めの内は我慢したが遂には障子を閉けて外を見る事もあるの何時か小供に見られた
54	は障子を閉けて外を見る事もあるの何時か	小供	に見られた物と見えて或日亭主が来て「御母さん 誠に申葉ましたが家の都合上一時御立
55	るので何時か小供に見られた物と見えて或日	母	が来て「御母さん 誠に申葉ましたが家の都合上一時御立退きを願ひたい。實は出来得る
56	供に見られた物と見えて或日亭主が来て「御	母	さん 誠に申葉ましたが家の都合上一時御立退きを願ひたい。實は出来得る丈御世話致す考
57	誠に申葉ました	家	の都合上一時御立退きを願ひたい。實は出来得る丈御世話致す考でありました世間の噂
58	實は出来得る丈御世話致す考でありましたが	世	間の噂が甚だしいので店の梨子も、りんごも賣れ行きが惡い様で一家の經營に差支へては
59	で店の梨子も、りんごも賣れ行きが惡い様で	一家	の經營に差支へては一家の經濟が取れません」と。又此の家をも追出された母の辛さ
60	が取れません」と。又此の	家	をも追出された母の辛さは並大抵では無かつたらう。其翌日又或一軒の貸家が見付かつた
61	の辛さは並大抵では無かつたらう。其翌日又或一軒の	母	の辛さは並大抵では無かつたらう。其翌日又或一軒の貸家が見付かつた。湖沼町の○番地
62	屋の事と厠は外にある。臺所と庭は狭いが	私	には誠に宜い隠家であつた。或一日母の身上に付て二三の來客があつた。世を偲ぶ身
63	には誠に宜い隠家であつた。或一日	母	の身上に付て二三の來客があつた。世を偲ぶ身の襦を早く閉じて奥に這入つた。三十
64	には誠に宜い隠家であつた。或一日母の	身	の上に付て二三の來客があつた。世を偲ぶ身の襦を早く閉じて奥に這入つた。三十分
65	であつた。或一日母の身上に付て二三の來	客	があつた。世を偲ぶ身の襦を早く閉じて奥に這入つた。三十分一時間未だ客は返らぬ二
66	身の上に付て二三の來客があつた。世を偲ぶ	身	の襦を早く閉じて奥に這入つた。三十分一時間未だ客は返らぬ二時間更に返る氣色はな
67	閉じて奥に這入つた。三十分一時間未だ	客	は返らぬ二時間更に返る氣色はない。私は小便が膀胱から破裂しそをになるので陰部を確
68	未だ客は返らぬ二時間更に返る氣色はない。	私	は小便が膀胱から破裂しそをになるので陰部を確りかして押えて早く返つて呉れば宜いと
69	く返つて呉れば宜いと只管念じたが却つて	客	は此の暑いのに襦を明け様ではないかと云う母を驚いたらうが私も困つた母の空咳を合圖
70	暑いのに襦を明け様ではないかと云う	母	も驚いたらうが私も困つた母の空咳を合圖に押込みへ駆け込んだので其の時に手を放した
71	を明け様ではないかと云う母も驚いたらうが	私	も困つた母の空咳を合圖に押込みへ駆け込んだので其の時に手を放した爲押入れの中へ小
72	は無いかと云う母も驚いたらうが私も困つた	母	の空咳を合圖に押込みへ駆け込んだので其の時に手を放した爲押入れの中へ小便大便迄是
73	の中へ小便大便迄是に経験の無い事をした。	客	の歸つた跡で母は笑つた。私は随分苦しかつた。而しこんな事では癩病の常で誰でも同病
74	是に経験の無い事をした。客の歸つた跡で	母	は笑つた。私は随分苦しかつた。而しこんな事では癩病の常で誰でも同病者の覺ある事と
75	は笑つた。	私	は随分苦しかつた。而しこんな事では癩病の常で誰でも同病者の覺ある事と思ふ。母は
76	た。私は随分苦しかつた。而しこんな事では	癩病	の常で誰でも同病者の覺ある事と思ふ。母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し私
77	苦しかつた。而しこんな事では癩病の常で	誰	でも同病者の覺ある事と思ふ。母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し私迄連れて行
78	かつた。而しこんな事では癩病の常で誰でも	同病者	の覺ある事と思ふ。母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し私迄連れて行く事は
79	母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し	私	迄連れて行く事は出来ぬ、どをした物と種々と考えた様だが更に名案も浮かばない。私は
80	母は三度目の嫁入を餘儀なくされた。而し	私	は元町二那蘇教會の慈善病院長ニオネジム女に敢ひを乞うた。前にも云え
81	様だが更に名案も浮かばない。	私	は元町二那蘇教會の慈善病院長ニオネジム女に敢ひを乞うた。前にも云え
82	案も浮かばない。私は元町二那蘇教會の慈善	病院	長ニオネジム女に敢ひを乞うた。前にも云える通り女を童貞と呼びて一
83	も云える通り	女	を童貞と呼びて一身を神に捧げて社會救済の爲に雨の日風の日の別なく函館の市中を歩
84	も云える通り女を童貞と呼びて一	身	を神に捧げて社會救済の爲に雨の日風の日の別なく函館の市中を歩いて貧困者を慰問する
85	も云える通り女を童貞と呼びて一身を	神	に捧げて社會救済の爲に雨の日風の日の別なく函館の市中を歩いて貧困者を慰問する人
86	える通り女を童貞と呼びて一身を神に捧げて	社會	救済の爲に雨の日風の日の別なく函館の市中を歩いて貧困者を慰問する人に専ら御願し
87	歩いて	貧困者	を慰問する人に専ら御願した。早速許されて私は戸籍本を携えて駿河の國の富士の
88	を慰問する人に専ら御願した。早速許されて	私	は戸籍本を携えて駿河の國の富士の裾野の病院に入る事になつたわ後の事。世に無
89	病野	神	に入る事になつたわ後の事。世に無神論者あり、神佛の有無を論ず。然らば吾
90	世	世	に無神論者あり、神佛の有無を論ず。然らば吾等の如き不幸の輩は如何にして生命を全うするを
91	世に無	神	論者あり、神佛の有無を論ず。然らば吾等の如き不幸の輩は如何にして生命を全うするを
92	世に無神論者あり、	神佛	の有無を論ず。然らば吾等の如き不幸の輩は如何にして生命を全うするを得ん。神は正
93	に無神論者あり、神佛の有無を論ず。然らば	吾	等の如き不幸の輩は如何にして生命を全うするを得ん。神は正義なり、誠を照らしオネジ
94	神佛の有無を論ず。然らば吾等の如き不幸の	輩	は如何にして生命を全うするを得ん。神は正義なり、誠を照らしオネジム修道女を
95	得ん。	女	は正義なり、誠を照らしオネジム修道女をして我等親子を愛の懷ろに抱かし
96	は正義なり、誠を照らしオネジム修道	神	をして我等親子を愛の懷ろに抱かした。蓋し之を神ある證據と云わずして何んぞ、誰ん
97	り、誠を照らしオネジム修道女をして	我等親子	を愛の懷ろに抱かした。蓋し之を神ある證據と云わずして何んぞ。誰んぞ今此處

図表 10

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	又又閑静なる別天地 是即ち靜岡縣富士岡村	神山復生病院	である。私は當病院に 助けられて衣食住に少しも不自由を感じず今迄の苦痛は
2	是即ち靜岡縣富士岡村神山復生病院である。	私	は當病院に 助けられて衣食住に少しも不自由を感じず今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つ
3	ぜず今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つた。	私	は癩病の事をあまり知らなかつたが多くの人は能く色々々の事を説明して呉れたが私は性
4	今迄の苦痛は夢の様な気持ちに成つた。私は	癩病	の事をあまり知らなかつたが多くの人は能く色々々の事を説明して呉れたが私は性来
5	ま 知りなかつたが多くの	人	は能く色々々の事を説明して呉れたが私は性来の激情心で癩病と云われ るを好まなかつた
6	くの人達は能く色々々の事を説明して呉れたが	私	は性来の激情心で癩病と云われ るを好まなかつた。故に自分は胎毒で癩病と違つて其部
7	の事を説明して呉れたが私は性来の激情心で	癩病	と云われ るを好まなかつた。故に自分は胎毒で癩病と違つて其都度癩と胎毒と皮膚病
8	るを好まなかつた。故に	自分	は胎毒で癩病と違つて其都度癩と胎毒との區別を知らぬが兎 角自分の思つ
9	るを好まなかつた。故に自分は	胎毒	で癩病と違つて其都度癩と胎毒と皮膚病との區別を知らぬが兎 角自分の思つて居た
10	るを好まなかつた。故に自分は胎毒で	癩病	と違つて其都度癩と胎毒と皮膚病との區別を知らぬが兎 角自分の思つて居た事が是
11	た。故に自分は胎毒で癩病と違つて其都度	癩	と胎毒と皮膚病との區別を知らぬが兎 角自分の思つて居た事が是迄の病症の變化と他の
12	故に自分は胎毒で癩病と違つて其都度癩と	胎毒	と皮膚病との區別を知らぬが兎 角自分の思つて居た事が是迄の病症の變化と他の人の
13	分は胎毒で癩病と違つて其都度癩と胎毒と	皮膚病	との區別を知らぬが兎 角自分の思つて居た事が是迄の病症の變化と他の人の云所と
14	に	自分	の思つて居た事が是迄の病症の變化と他の人の云所と少しも違はなかつたので始めて
15	に角自分の思つて居た事が是迄の	病症	の變化と他の人の云所と少しも違はなかつたので始めて癩病か …。而し思うに此醫術の
16	分の思つて居た事が是迄の病症の變化と他の	人	の云所と少しも違はなかつたので始めて癩病か …。而し思うに此醫術の進で一心に治療し
17	の人の云所と少しも違はなかつたので始めて	癩病	か …。而し思うに此醫術の進で一心に治療して癒らぬ答がない。人は癒らなくとも自分
18	醫術の進で一心に治療して癒らぬ答がない。	人	は癒らなくとも自分丈では癒て見 せると又其れで無ければ家の再興は出来ぬ。又癒らねば
19	治療して癒らぬ答がない。人は癒らなくとも	自分	丈では癒て見 せると又其れで無ければ家の再興は出来ぬ。又癒らねば又再び母と逢う事
20	せると又其れで無ければ	家	の再興は出来ぬ。又癒らねば又再び母と逢う事が出来ぬのみか一生日蔭物 で朽ち果てるか
21	ければ家の再興は出来ぬ。又癒らねば又再び	母	と逢う事が出来ぬのみか一生日蔭物 で朽ち果てるかと思へば地に伏して慟哭した。友が慰
22	らねば又再び母と逢う事が出来ぬのみか一生	日蔭物	で朽ち果てるかと思へば地に伏して慟哭した。友が慰めて呉れ様かどうしようが更に
23	朽ち果てるかと思へば地に伏して慟哭した。	友	が慰めて呉れ様かどうしようが更に無言であつた。 故に他の患者は「今度来た小僧は氣が
24	故に他の	患者	は「今度来た小僧は氣が狂つた」と。否自分は發狂もしない。而し自殺と感念は失せて
25	故に他の患者は「今度来た	小僧	は氣が狂つた」と。否自分は發狂もしない。而し自殺と感念は失せて 自暴自棄に陥つ
26	患者は「今度来た小僧は氣が狂つた」と。否	自分	は發狂もしない。而し自殺と感念は失せて 自暴自棄に陥つた。而し世に是程恐ろしい物
27	自暴自棄に陥つた。而し	世	に是程恐ろしい物はない。其れには信仰も救護も人情も一切を破壊し盡さ ねば止まん。人
28	ねば止まん。	人	を呪ひ世を呪ひて……。一青年が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日神に付て 質問し
29	ねば止まん。人を呪ひ	世	を呪ひて……。一青年が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日神に付て 質問した。宗教
30	ねば止まん。人を呪ひ世を呪ひて……。	一青年	が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日神に付て 質問した。宗教的に明確の答を得
31	ん。人を呪ひ世を呪ひて……。	一青年	が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日神に付て 質問した。宗教的に明確の答を得た靈魂に付て
32	年が折々自分を慰めた段々馴れて自分は或日	自分	に付て 質問した。宗教的に明確の答を得た靈魂に付ても又確答を得た又或時は口角泡を飛
33	真理には敵せず屈服されて	自分	の一切の疑問は快刀亂麻の如き答へで自分でも満足した。徒らに貴重 なる命を失うも傷
34	で自分の一切の疑問は快刀亂麻の如き答へで	自分	でも満足した。徒らに貴重 なる命を失うも満足した。徒らに貴重 なる命を失うも傷
35	失うも魂は未來永遠迄も存在する事と一切は	神	の攝理の内に歩み而してその善惡の爲に賞罰 を受ける。洋の東西を論ぜず、貴賤貧富の別
36	洋の東西を論ぜず、貴賤貧富の別もなく、	皆	死は免れぬ者と。死後に残るものは唯善と惡とののみ、私は十七に死んだのだ。五十年百年
37	とのみ、	我	は十七に死んだのだ。五十年百年の壽命を保つたからで必ずしも人生の幸福とは云はれ
38	信仰其れを以て誠の幸福と云はねば成らん。	自分	は此處に於て是迄社會の憎惡とひがみと其外一切を捨て、任務はねば成らんと遂に明治
39	迄	社會	の憎惡とひがみと其外一切を捨て、任務はねば成らんと遂に明治三十八年五月御昇
40	ペルトラン師及	私	の信仰に付て語る可き事柄多くあれ共此處に略す。

図表 11

分析連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	頃であつた故テストウィード	師	が東海道諸國に布教の爲諸國を巡回の折柄癩病患者 が路傍に徘徊して居るのに出會ひ
2	東海道諸國に布教の爲諸國を巡回の折柄癩病	癩病	患者 が路傍に徘徊して居るのに出會ひ甚だ憐れみ同情の念を動かされた。或日駿州御殿
3	諸國に布教の爲諸國を巡回の折柄癩病	患者	が路傍に徘徊して居るのに出會ひ甚だ憐れみ同情の念を動かされた。或日駿州御殿で
4	念を動かされた。或日駿州御殿で一人の女	癩病	患者を見るに及び愈々同情の念を起し茲に此の不幸者を救つて一には彼等を助くると共
5	情の念に及び愈々同情の念を起し茲に此の	不幸者	を救ひて一には彼等を助くると共に一には以て 世の助けとせんと決心した此の女癩病
6	情の念を起し茲に此の不幸者を救つて一には	彼等	を助くると共に一には以て 世の助けとせんと決心した此の女癩病患者と云ふのは此の惡
7	世の助けとせんと決心した此の女癩病	患者	と云ふのは此の惡疾に罹るや僧者を契つた夫に捨てられ、 親戚に疎外され廣き世界に使
8	者と云ふのは此の惡疾に罹るや僧者を契つた	夫	に捨てられ、親戚に疎外され廣き世界に使る者なく、驛外れの小川のの上に板で僅かに雨露
9	親戚に疎外され廣き世界に使つた	者	なく、驛外れの小川のの上に板で僅かに雨露を凌ぐ丈の小屋を造り 其中一人一人淋しく寢起
10	其中に	一人	淋しく寢起して居た。彼女は病の爲に眼が見えなかつた。唯さえ困るのに俄盲目の全
11	其中に一人淋しく寢起して居た。彼女は	病	は病の爲に眼が見えなかつた。唯さえ困るのに俄盲目の全く 外出の自由迄失つた。寢る
12	其中に一人淋しく寢起して居た。彼女は	病	の爲に眼が見えなかつた。唯さえ困るのに俄盲目の全く 外出の自由迄失つた。寢るに一枚
13	の爲に眼が見えなかつた。唯さえ困るのに俄	盲目	の全く 外出の自由迄失つた。寢るに一枚の蒲團もなく襦袢を集めて蓑具に代へ板の上に伏
14	襦袢を集めて蓑具に代へ板の上に伏して居た。	村人	の恵に依り僅か一日に一碗の粟飯と一杯の水で辛くも生命を繋ぐと云ふ。餌主のない
15	惨な物ではないと思はれたと云。	彼女	は斯かる惨な境遇に絶え兼ねて自殺しようと思はれたとか。其時幸ひテストウィード
16	時幸ひテストウィード	師	が尋ね行き人は死んでも其の靈は永遠に消ゆる物で無い事を懇ろに説き聞か せ殘残の人生
17	せ殘残の人生をも餘して居る	彼女	を慰められた。嗚呼世に安穩の生を送る者の爲には死は左程痛切 に感ずるものではない
18	生をもて餘して居る彼女を慰められた。嗚呼	世	に安穩の生を送る者の爲には死は左程痛切 に感ずるものではない。彼女は世に類ひ少なき
19	に感ずるものではない。	彼女	は世に類ひ少なき不幸者であつたが爲却つて死後に一道の光明を認 める事が出来其昔
20	に感ずるものではない。彼女は	世	に類ひ少なき不幸者であつたが爲却つて死後に一道の光明を認 める事が出来其昔しみの
21	ものではない。彼女は世に類ひ少なき不幸な	者	であつたが爲却つて死後に一道の光明を認 める事が出来其昔しみの生を慰める機会を持ち
22	しみの生を慰める機会を持ち得たのである。	彼女	の如き恐れむべき癩病者が御殿場の 附近には少なからず居た爲に茲に於て師は顯然とし
23	を持ち得たのである。彼女の如き恐れむべき	癩病	者が御殿場の 附近には少なからず居た爲に茲に於て師は顯然として此の不幸なる者を救
24	附近には少なからず居た爲に茲に於て	師	は顯然として此の不幸なる者を救ふべく起つたのが是の病院 の建設される動機であつた。
25	た爲に茲に於て師は顯然として此の不幸なる	者	を救ふべく起つたのが是の病院 の建設される動機であつた。初め師は佛國にある友人等につ
26	て此の不幸なる者を救ふべく起つたのが是の	病院	の建設される動機であつた。初め師は佛國にある友人等に書を送つて些少の施與を得て
27	の建設される動機であつた。初め	佛國	は佛國にある友人等に書を送つて些少の施與を得て見れば以て御 殿場に細やかなる家を借
28	設される動機であつた。初め師は佛國にある	友人	等に書を送つて些少の施與を得て見れば以て御 殿場に細やかなる家を借り受け六人の同
29	殿場に細やかなる家を借り受け六人の	同病者	を收容した。其後追々外國慈善家に書札を仰ぎて事業を 擴張しようとしたが御殿場で
30	受け六人の同病者を收容した。其後追々外國	慈善家	に書札を仰ぎて事業を 擴張しようとしたが御殿場で敷地を賣られる事が出来なかつ
31	が實に明治二十年の事であつたと聞く。……	外人	の爲に種々の不便の影がらざるに 土地の買入、縣廳との交渉、家屋の建築、患者の治療
32	土地の買入、	縣廳	との交渉、家屋の建築、患者の治療、醫者と看護人との診察、藥料の購求等總て自

33	土地の買入、縣廳との交渉、家屋の建築、	患者	の治療、醫者と看護人との診察、藥餌食料の購求等總て自分一人の手で便じられた。斯
34	縣廳との交渉、家屋の建築、患者の治療、	醫者	と看護人との診察、藥餌食料の購求等總て自分一人の手で便じられた。斯く何人の助け
35	て	自分	一人の手で便じられた。斯く何人の助けも無く身一つで此の煩雜なる業務を便する
36	て自分一人の手で便じられた。斯く	何人	の助けも無く身一つで此の煩雜なる業務を便するに加えて村民は此の例なき事業に目
37	人の手で便じられた。斯く此人の助けは無く	身	一つで此の煩雜なる業務を便するに加えて村民は此の例なき事業に目を待て、自然の情
38	業に目を待て、自然の情とて、自然の情とはしき	病院	を建つことを嫌ひ、種々なる 苦情を持ち込み、妨げの運動を試みるら、師の此際
39	苦情を持ち込み、妨げの運動を試みるら、	師	の此際の苦勞は實に一一通りで無かつた云。斯く二十年より二十二年六月に至つて漸く
40	であつたが、僅かの年月で	紳	の擧げに信賴した通り、全く其の種に付く事が出来た。然るに此の創業に多大なる困難
41	に多大なる困難と苦心とを重ねた爲に	師	は遂に病を得て惜しい哉半途にして此の世を去られたのである……。師に代つたのは同じ
42	多大なる困難と苦心とを重ねた爲に師は遂に	病	を得て惜しい哉半途にして此の世を去られたのである……。師に代つたのは同じ公教宣
43	に師は遂に病を得て惜しい哉半途にして此の	世	を去られたのである……。師に代つたのは同じ公教宣教師なるヴィグルス
44	る……。	師	に代つたのは同じ公教宣教師なるヴィグルス師であつた。此の時には社健
45	る……。師に代つたのは同じ公教	宣教師	なるヴィグルス師であつた。此の時には社健な患者の爲に 農業を營ま
46	師であつた。此の時には社健な	患者	の爲に 農業を營ませる目的で其れ等に必要なる建物を殖やし、收容患者の數をも増して事
47	が、	師	も又不幸間もなく永眠したと云ふ。二十六年に至つてペルトラン師が
48	た。僅かの間に	院主	は三度代つた。私は此の方の御世話になつた。因みに當院の組織は極小人数で要 務一切
49	た。僅かの間に院主は三度代つた。私は此の	方	の御世話になつた。因みに當院の組織は極小人数で要 務一切を辨じた。院主と醫者と幹事
50	つた。私は此の方の御世話になつた。因みに	當院	の組織は極小人数で要 務一切を辨じた。院主と醫者と幹事と小使と一人づつと、働き得
51	の御世話になつた。因みに當院の組織は極小	人	數で要 務一切を辨じた。院主と醫者と幹事と小使と一人づつと、働き得らるゝ程度の患者
52	務一切を辨じた。	院主	と醫者と幹事と小使と一人づつと、働き得らるゝ程度の患者をして必要の野菜 を作り、
53	務一切を辨じた。院主と	醫者	と幹事と小使と一人づつと、働き得らるゝ程度の患者をして必要の野菜 を作り、牛馬を
54	務一切を辨じた。院主と醫者と	幹事	と小使と一人づつと、働き得らるゝ程度の患者をして必要の野菜 を作り、牛馬を飼ひ、
55	務一切を辨じた。院主と醫者と幹事と	小使	と一人づつと、働き得らるゝ程度の患者をして必要の野菜 を作り、牛馬を飼ひ、山林に
56	務一切を辨じた。院主と醫者と幹事と小使と	一人	づつと、働き得らるゝ程度の患者をして必要の野菜 を作り、牛馬を飼ひ、山林に薪を取
57	務と小使と一人づつと、働き得らるゝ程度	の患者	をして必要の野菜 を作り、牛馬を飼ひ、院内の草取り掃除等をさせた
58		當院	の所有地はニヶ所有つては約七町歩、其處には種々の建物と二町歩の畑とがある
59	ではれは十四町歩である。	患者	は之れに毎年苗木を植け取り、四五年度目づつに順次薪に切り取る事が出 来る。馬は五頭で
60	馬は五頭で農に使い、牛は社六頭牝一頭で、	患者	に用ゆる乳を搾る。牛馬は病院の物で無く、 皆院長の物で有るが其れを患者に與へて居
61	頭牝一頭で、患者に用ゆる乳を搾る。牛馬は	病院	の物で無く、 皆院長の物で有るが其れを患者に與へて居た。此外にも豚と兎をも飼つて
62	皆	院長	の物で有るが其れを患者に與へて居た。此外にも豚と兎をも飼つて居た故に、購求
63	皆院長の物で有るが其れを	患者	に與へて居た。此外にも豚と兎をも飼つて居た故に、購求するものは 米鹽丈で、味噌醬
64	米鹽丈で、味噌醬油等は皆	患者	の手に成つた。一年の經費凡六、七千圓と聞 外基本財産と云ふ物も 無く、前年度の繰
65	く、前年度の繰越金が三千圓位であると云ふ。	患者	は大抵、七、八十名居て自分の家の如くに働いて居る。私の居た時分迄には收容者數は
66	居た時分迄には收容者數は四百八十七名で、	死者	が二百五十六人有つたと、娯樂としては園遊會、芝居、又は折々富士登山、箱根見物
67	登山、箱根見物、兎狩、氷江等、之等は必ず	院長	も友として、一日を愉快 に遊ぶ。患者の外出入は自由であるが、警察も地方人も何の干渉
68	箱根見物、兎狩、氷江等、之等は必ず院長も	友	として、一日を愉快 に遊ぶ。患者の外出入は自由であるが、警察も地方人も何の干渉もない
69	に遊ぶ。患者の外出入は自由であるが、	患者	の外出入は自由であるが、警察も地方人も何の干渉もないのは、此の病院の特長とする處で
70	に遊ぶ。患者の外出入は自由であるが、警察も	地方人	も何の干渉もないのは、此の病院の特長とする處である。治療は一一通り研究するも
71	に遊ぶ。患者の外出入は自由であるが、警察も	地方人	も何の干渉もないのは、此の病院の特長とする處である。治療は一一通り研究するも
72	警察も地方人も何の干渉もないのは、此の	病院	の特長とする處である。治療は一一通り研究するも 更に効果は見えぬ。後藤博士
73	一一通り研究するも、更に効果は見えぬ。	後藤博士	の處方及び東京(トウキン)産の「ホアンナン」 に依つて多少治した様に見えても退
74	多少治した様に見えても退院後再び入院する	者	もあつた。目下土肥博士、全生病院長光田醫 師の教えに基く大風子油を採用して盛んに服
75	えても退院後再び入院する者もあつた。目下	土肥博士	、全生病院長光田醫 師の教えに基く大風子油を採用して盛んに服薬に注射に務めて
76	入院する者もあつた。目下土肥博士、全生病	院長	、光田醫師の教えに基く大風子油を採用して盛んに服薬に注射に務めて居る。

図表 12

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	を制すには教に近づきより外ないと思ひ、	私	は常に教理を研究した。御堂えも行 つた。御祈りもした。けれ共一端其の場を去ると又
2	場を去ると又以前の邪惡には捕獲された。	紳	と惡鬼とは正反對で、又紳と惡魔とは離れ難いもので非常に關係の深いもので、私がいく
3	ると又以前の邪惡とは捕獲された。紳と惡	鬼	とは正反對で、又紳と惡魔とは離れ難いもので非常に關係の深いもので、私がいくら情
4	で、又	紳	と惡魔とは離れ難いもので非常に關係の深いもので、私がいくら情慾を断たうと折つても
5	で、又紳と	惡魔	とは離れ難いもので非常に關係の深いもので、私がいくら情慾を断たうと折つても、魔
6	は離れ難いもので非常に關係の深いもので、	私	がいくら情慾を断たうと折つても、魔の力は偉大なもので、仲々壓え切れなかつた。私の
7	力は偉大なもので、仲々壓え切れなかつた。	私	の様小供の時からの病人でも、而も此の宗教病院に 居て、深く戀の苦痛を感じた事を、此
8	大なもので、仲々壓え切れなかつた。私の様	小供	の時からの病人でも、而も此の宗教病院に 居て、深く戀の苦痛を感じた事を、此の豚の
9	々壓え切れなかつた。私の様小供の時からの	病人	でも、而も此の宗教病院に 居て、深く戀の苦痛を感じた事を、此の豚の様に喰つて居て
10	の豚小供の時からの病人でも、而も此の宗教	病院	に 居て、深く戀の苦痛を感じた事を、此の豚の様に喰つて居て、齧て居れば宜い病人に
11	此の豚の様に喰つて居て、齧て居れば宜い	病人	に而も二度も死の をかと思つた事のある自分に、感んな魔などぞ恥かしい話ではないか
12	をかと思つた事のある	自分	に、感んな魔などぞ恥かしい話ではないか。……自分は今此の樂園に 這入るに及んで、
13	感んな魔などぞ恥かしい話ではないか。……	自分	は今此の樂園に 這入るに及んで、精神に油断が出来た。如何なる英雄も戀の高には一國
14	るに及んで、精神に油断が出来た。如何なる	英雄	も戀の高には一國一城を亡くするに於て吾々凡人 に於ては寧ろ當然の事で全く下劣の根
15	油断が出来た。如何なる英雄も戀の高には一	國	一城を亡くするに於て吾々凡人 に於ては寧ろ當然の事で全く下劣の根性に陥つた。悠うし
16	に於ては寧ろ當然の事で全く下劣の根性に陥つた。悠うして居る内病氣は多少地方に向	人	は多少快方に向つた。根性は是れも正反對で又是の正反對が災の源であらう。自分は
17	るに於ては寧ろ當然の事で全く下劣の根性に陥つた。悠うして居る内	病氣	は多少快方に向つた。根性は是れも正反對で又是の正反對が災の源であらう。自分は
18	も正反對で又是の正反對が災の源であらう。	自分	は或一婦人の爲に見事戀の境となつた。人間である以上、婦人は悪くない。而し社會の
19	又是の正反對が災の源であらう。自分は或一	婦人	の爲に見事戀の境となつた。人間である以上、婦人は悪くない。而し社會の人達と違つ
20	自分は或一婦人の爲に見事戀の境となつた。	人間	である以上、婦人は悪くない。而し社會の人達と違つて自分如き癡病に女の必要は認め
21	である以上、	婦人	は悪くない。而し社會の人達と違つて自分如き癡病に女の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒
22	である以上、婦人は悪くない。而し	社會	の人達と違つて自分如き癡病に女の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒の御恩を蒙つて居る身
23	である以上、婦人は悪くない。而し社會	の人達	と違つて自分如き癡病に女の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の
24	婦人は悪くない。而し社會の人達と違つて	自分	如き癡病に女の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の愛に溺れるな
25	悪くない。而し社會の人達と違つて自分如	癡病	に女の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の愛に溺れるなど意氣地
26	い。而し社會の人達と違つて自分如き癡病に	女	の必要は認めぬ筈だ。而も 孤兒の御恩を蒙つて居る身に女の愛に溺れるなど意氣地の無い
27	孤兒の御恩を蒙つて居る	身	に女の愛に溺れるなど意氣地の無いにも程があると思つた。……よし地 獄に落ちようが、
28	孤兒の御恩を蒙つて居る身に	女	の愛に溺れるなど意氣地の無いにも程があると思つた。……よし地 獄に落ちようが、教に

76	ん。邪念の	鬼	は僅かな隙を窺って侵入し、巧みに人を墮落させて霊肉共に滅亡の破目に至らしむ。基
77	念の鬼は僅かな隙を窺って侵入し、巧みに	人	を墮落させて霊肉共に滅亡の破目に至らしむ。基督の教に「労働せよ。断食をせよ。祈
78	断食をせよ。祈禱をせよ」と。「之れ即ち	身	を立てる爲なり」と「左に非ざれば身を清くして生を全うする事難からん」と。情慾は、人
79	くして生を全うする事難からん」と。情慾は、	人	の最もかり易き誘ひにして、人は是を些細の事なりと云も、よく・研究し来れば、戀
80	源にして、之れが爲には眼暗み、智慧も、	親	も、願も、信仰も、何の其だ。實に恐ろしい事では無いか。私は是れに勝たん爲、總ての
81	も、	國	も、信仰も、何の其だ。實に恐ろしい事では無いか。私は是れに勝たん爲、總ての労働
82	も、何の其だ。實に恐ろしい事では無いか。	私	は是れに勝たん爲、總ての労働と、断食と、祈禱もしたが、直接感化を與へたのは労働
83	は労働も、祈禱も、断食でもなく、只	生ける手本	、即ち 愛の實行者、即ち院長ベルトルン師であつた。
84	愛の	實行者	、即ち院長ベルトルン師であつた。

図表 13

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	私は前にも云通り	院長	の訓誡と、其の人格とに依つて、僅かに邪念拂ふ事が出来たと同時に、以後は決して
2	馬を引いて草刈りに行き、伐木に耕作に、或日	院主	に従つて 獵に行つた。其夜はヘトくに天も私も寝て、院主と一夜を炭小屋に明かし
3	獵に行つた。其夜はヘトくに天も私も寝て	私	も寝て、院主と一夜を炭小屋に明かした事もあつた。……山の頂に登つて、四方の景
4	行つた。其夜はヘトくに天も私も寝て、	院主	と一夜を炭小屋に明かした事もあつた。……山の頂に登つて、四方の景色を見渡した
5	の善を思ひ、恍惚として草に座し、	曾我兄弟	の善を思ひ、恍惚として草に座し、救主イエスキリストが
6	曾我兄弟の善を思ひ、恍惚として草に座し、	救主イエスキリスト	が數多の天使と共に昇天遊ばした オリーブ山も斯
7	し、救主イエスキリストが數多の	天使	と共に昇天遊ばした オリーブ山も斯くやと思はれた。……全圖五ヶ所の癩癩
8	山も斯くやと思はれた。……全圖五ヶ所の	癩癩癩癩	と、私立病院數ある中に恐らく是の 位の所はないと思ふ。一難去つて一難來る
9	はれた。……全圖五ヶ所の癩癩癩癩と、私	病院	數ある中に恐らく是の 位の所はないと思ふ。一難去つて一難來る。此の愉快な生活
10	生活も一時の現夢に過ぎなかつた。基督教では	此世	を涙の谷と云ふ。神は再び私を試みた。永久に取り返しのつかぬ盲目と!!!成朝の事、
11	は再び私を試みた。永久に取り返しのつかぬ	神	は再び私を試みた。永久に取り返しのつかぬ盲目と!!!成朝の事、何時迄待つても夜
12	ふ。神は再び	私	を試みた。永久に取り返しのつかぬ盲目と!!!成朝の事、何時迄待つても夜が明けぬ。人
13	は再び私を試みた。永久に取り返しのつかぬ	盲目	と!!!成朝の事、何時迄待つても夜が明けぬ。人に聞けば太陽は高いと。醫の診察を乞
14	ぬ。人に聞けば太陽は高いと。	醫	の診察を乞。薬用も効なく、遂に鎌の中を歩行する様であつた。人は嫌な物に癩病に
15	人は嫌な物	癩病	に、嫌な物を盲目に贅えた。私は其の嫌な一人、而も癩病の……。若し自分 に基督教
16	人は嫌な物に癩病に、嫌な物を	盲目	に贅えた。私は其の嫌な一人、而も癩病の……。若し自分 に基督教の教が浸みて居なかつ
17	ない物を癩病に、嫌な物を盲目に贅えた。	私	は其の嫌な一人、而も癩病の……。若し自分 に基督教の教が浸みて居なかつたら、人の笑
18	に、嫌な物を盲目に贅えた。私は其の嫌な	一人	。而も癩病の……。若し自分 に基督教の教が浸みて居なかつたら、人の笑ひが皆癩の種
19	物を盲目に贅えた。私は其の嫌な一人、而も	癩病	の……。若し自分 に基督教の教が浸みて居なかつたら、人の笑ひが皆癩の種では無かつ
20	、私は其の嫌な一人、而も癩病の……。若し	自分	に基督教の教が浸みて居なかつたら、人の笑ひが皆癩の種では無かつたらうか? 之
21	に基督教の教が浸みて居なかつたら、	人	の笑ひが皆癩の種では無かつたらうか? 之れが人の盲目根性と嫌はれる所であらう。
22	之れが	人	の盲目根性と嫌はれる所以であらう。私は壯健の盲目に、「あなたは何が一番悪いのか」と
23	之れが人の	盲目	根性と嫌はれる所以であらう。私は壯健の盲目に、「あなたは何が一番悪いのか」と 問
24	わが人の盲目根性と嫌はれる所以であらう。	私	は壯健の盲目に、「あなたは何が一番悪いのか」と 問ふた。其人は「自分の子を抱いても
25	盲目根性と嫌はれる所以であらう。私は壯健の	盲目	に、「あなたは何が一番悪いのか」と 問ふた。其人は「自分の子を抱いても顔の見えない
26	はれる所以であらう。私は壯健の盲目に、「	あなた	は何が一番悪いのか」と 問ふた。其人は「自分の子を抱いても顔の見えないのが一番
27	問ふた。	其人	は「自分の子を抱いても顔の見えないのが一番悪いのか」と 問ふた。私は考えるに、是は違つて
28	問ふた。其人は「	自分	の子を抱いても顔の見えないのが一番悪いのか」と。私は考えるに、是は違つて 居るので
29	問ふた。其人は「自分の	子	を抱いても顔の見えないのが一番悪いのか」と。私は考えるに、是は違つて 居るのではない
30	抱いても顔の見えないのが一番悪いのか」と。	私	は考えるに、是は違つて 居るのではないかとと思ふた。癩病と健康の盲目とは對照にならぬ
31	居るのではないかとと思ふた。	癩病	と健康の盲目とは對照にならぬ。前者は眼こそ不自由なれは悪く完 全なる者だ。後者
32	居るのではないかとと思ふた。癩病と	健康	の盲目とは對照にならぬ。前者は眼こそ不自由なれは悪く完 全なる者だ。後者は眼以
33	居るのではないかとと思ふた。癩病と健康の	盲目	とは對照にならぬ。前者は眼こそ不自由なれは悪く完 全なる者だ。後者は眼以外何所
34	した。癩病と健康の盲目とは對照にならぬ。前	者	は眼こそ不自由なれは悪く完 全なる者だ。後者は眼以外何所にも一として備はりし所な
35	金なる者だ。後	者	は眼以外何所にも一として備はりし所なくして到底底にも何にもなる者でない。患者は
36	患者は此種の盲目となる	盲目	は多くして長命せば、必ず盲目となると云ふも過言ではない。私は遂に丹精も空しく、失
37	患者は此種の盲目多くして長命せば、必ず	盲目	となると云ふも過言ではない。私は遂に丹精も空しく、失明して仕舞つた。……發病當
38	ば、必ず盲目となると云ふも過言ではない。	私	は遂に丹精も空しく、失明して仕舞つた。……發病當時より以上の悲しみを再び味はつた
39	發病當時より以上の悲しみを再び味はつた。	癩病	で死し、盲目で死し、三度目の死こそ永遠の死では無からうか。

図表 14

各図表連番	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	國の進歩と共に	癩癩癩癩	の設置は明治四十二年全圖五ヶ所と決定した。其の構造は四圍に堀を廻らして柵を
2	井蛙の如き	私等	は是れを眞實と聞た。又一切を規則づくで仲々厳しいと。私等は厳しからうが樂だ らう
3	と聞た。又一切を規則づくで仲々厳しいと。	私等	は厳しからうが樂だ らうが此處より死地も場所はないと格別心にもかけなかつた。四十
4	別心にもかけなかつた。四十五年の二月或日	〇〇	が當院へ入院を乞ふた。寒風肌を裂く寒さと院主はいとゞ不慾に思ひ、直ちに入院を
5	を乞ふた。寒風肌を裂く寒さとて	院主	はいとゞ不慾に思ひ、直ちに入院を許した。然るに彼れは院 主を偽て居る事が知れた。
6	ゞ不慾に思ひ、直ちに入院を許した。然るに	彼れ	は院 主を偽て居る事が知れた。彼れ曰「某は某所に行く途中見物の爲一寸此處に立寄つ
7	主を偽て居る事が知れた。	彼れ	曰「某は某所に行く途中見物の爲一寸此處に立寄つたのだ。君達惡ん 小天地に而も外
8	主を偽て居る事が知れた。彼れ曰「	某	は某所に行く途中見物の爲一寸此處に立寄つたのだ。君達惡ん 小天地に而も外人の權權
9	主を偽て居る事が知れた。彼れ曰「某	所に行く途中見物の爲一寸此處に立寄つたのだ。君達惡ん	小天地に而も外人の權權を嘗
10	行く途中見物の爲一寸此處に立寄つたのだ。	君達	惡ん小天地に而も外人の權權を嘗めて居て、可哀想に一度廣い病院へ行つて見給へ。
11	小天地に而も	外人	の權權を嘗めて居て、可哀想に一度廣い病院へ行つて見給へ。お父様は日の丸だ。今丁
12	外人の權權を嘗めて居て、可哀想に一度廣い	病院	へ行つて見給へ。お父様は日の丸だ。今丁度増員中だ。出るなら今だ。」と頻りに煽動
13	は日の丸だ。今丁度増員中だ。出るなら今だ。」	お父様	は日の丸だ。今丁度増員中だ。出るなら今だ。」と頻りに煽動を試みた。故に多少心
14	試みた。故に多少心を動かされて二人、三人	隊	をなして逃走した。彼處に、此處に、秘密會議が三三五々。或は或夕暮、此の協議を凝す
15	をなして逃走した。彼處に、此處に、秘密	會議	が三三五々。或は或夕暮、此の協議を凝す群を見た。一夜くに逃走者が増す。眞面目
16	議が三三五々。或は或夕暮、此の協議を凝す	群	を見た。一夜くに逃走者が増す。眞面目の人達は憂慮したが、何しろ其頃政府病院の手
17	一夜くに	逃走者	が増す。眞面目の人達は憂慮したが、何しろ其頃政府病院の手當は非常によく、私
18	一夜・に逃走者が増す。眞面目の	人達	は憂慮したが、何しろ其頃政府病院の手當は非常によく、私達の考え及ばない位であつ
19	眞面目の人達は憂慮したが、何しろ其頃政府	病院	の手當は非常によく、私達の考え及ばない位であつた。其當時復生病院と政府病院の對
20	私達の考え及ばない位であつた。其當時復生	病院	と政府病院の對照は政府病院作業賃三錢五厘、被服一切給與、治療の完全と、労働時間
21	及ばない位であつた。其當時復生病院と政府	病院	の對照は政府病院作業賃三錢五厘、被服一切給與、治療の完全と、労働時間の短かいの
22	た。其當時復生病院と政府病院の對照は政府	病院	作業賃三錢五厘、被服一切給與、治療の完全と、労働時間の短かいのと、家族室のある

23	與、治療の完全と、労働時間の短かいのと、	家族	室のあるのと、其他の設備等手に取る如く知れた。復生病院は一日の労銀七厘と、貧乏
24	れた。復生	病院	は一日の労銀七厘と、貧乏人に限り被服の給與と、時間の永いのと、男女の關係の絶
25	れた。復生病院は一日の労銀七厘と、	貧乏人	に限り被服の給與と、時間の永いのと、男女の關係の絶 對に不可能とは、入院者に異
26	乏人に限り被服の給與と、時間の永いのと、	男女	の關係の絶對に不可能とは、入院者に異様の感を与えた。茲に於て私は患者中の室
27	對に不可能とは、	入院者	に異様の感を与えた。 茲に於て私は患者中の室長に、三人を促し會議を開く事にし
28	茲に於て	私	は患者中の室長に、三人を促し會議を開く事にした。幹事の列席を乞うて實情を訴え
29	茲に於て私は	患者	中の室長に、三人を促し會議を開く事にした。幹事の列席を乞うて實情を訴え
30	茲に於て私は患者中の	室長	に、三人を促し會議を開く事にした。幹事の列席を乞うて實情を訴え
31	茲に於て私は患者中の室長に、三人を促し	會議	を開く事にした。幹事の列席を乞うて實情を訴え
32	室長に、三人を促し會議を開く事にした。	幹事	の列席を乞うて實情を訴え
33	た。	幹事	も同情したが、曰く「私も役員柄何にも彼も知つて居ますが、御承知の通り官立と私
34	た。幹事も同情したが、曰く「	私	も役員柄何にも彼も知つて居ますが、御承知の通り官立と私とは 組織が異なつて御話に
35	柄何にも彼も知つて居ますが、御承知の通り	官立	と私立とは 組織が異なつて御話になりません。私も考慮中で私の一存にも行きません
36	も彼も知つて居ますが、御承知の通り官立と	私立	とは 組織が異なつて御話になりません。私も考慮中で私の一存にも行きませんから。院
37	組織が異なつて御話になりません。	私	も考慮中で私の一存にも行きませんから。院主に御願ひして見る」 との回答で私等に早速
38	私も考慮中で私の一存にも行きませんから。	院主	に御願ひして見る」 との回答で私等に早速願書を書いて漢字の手を経て院主に御願ひ
39	との回答で	私等	に早速願書を書いて漢字の手を経て院主に御願ひしたが、更に回答は無かつた。願書は二
40	答で私等に早速願書を書いて漢字の手を経て	院主	に御願ひしたが、更に回答は無かつた。願書は 二十一條で格別必要も感ぜぬ所もあるが
41	なる物は作業賃を三線にする事、(二) 弱い	者	に月々十五線の手當をする事、(三) 労働時間を短縮する事。幹事は回答の餘りに手問取
42	當とする事、(三) 労働時間を短縮する事。	幹事	は回答の餘りに手問取るのを院主に追求した 故、之れを理由として遂に退職と成つた。
43	縮する事。幹事は回答の餘りに手問取るのを	院主	に追求した 故、之れを理由として遂に退職と成つた。こうなつて見ると心配なのは患者
44	退職と成つた。こうなつて見ると心配なのは	患者	で、此儘にしてあるのは 願書をどうして呉れるかも又幹事の意向を窺つた。「外に理由
45	願書をどうして呉れるか又	幹事	の意向を窺つた。「外に理由は無いが只回答の追求が烈しかった為 だ」と。而して「私
46	だ」と。而して「	私	は職責の爲に懸れるのですから捨て置て下さい」と。此折原幹事は三代目の人で、二代
47	るのですから捨て置て下さい」と。此折原	幹事	は三代目の人で、二代目の某の傍若無人に引替えて全く母と敬ひ父と尊んだのを、今去
48	で、二代目の	某	の傍若無人に引替えて全く母と敬ひ父と尊んだのを、今去られるのは再び斯る幹事を 得難
49	で、二代目の某の傍若無人に引替えて全く	母	と敬ひ父と尊んだのを、今去られるのは再び斯る幹事を 得難いと、之れが一般の叫びであ
50	ひ父と尊んだのを、今去られるのは再び斯る	幹事	を得難いと、之れが一般の叫びであったので、其の復職を願う可く決議した。代表者十
51	得難いと、之れが	一般	の叫びであつたので、其の復職を願う可く決議した。代表者十名を選んで院主の門を叩
52	あつたので、其の復職を願う可く決議した。	代表者	十名を選んで院主の門を叩いた。院主は「あなたの方の事に付て色々心配して居ますが
53	職を願う可く決議した。代表者十名を選んで	院主	の門を叩いた。院主は「あなたの方の事に付て色々心配して居ますが、俄かに要求を容れ
54	の門を叩いた。院主	院主	は「あなたの方の事に付て色々心配して居ますが、俄かに要求を容れる譯には行きませ
55	の門を叩いた。院主は「	あなた方	の事に付ては院主の憤り甚だしく、私の氣に入らぬ 故敢てあがるので、皆様の要求とは
56	せん」と。回答の方は一段落となつたが、	幹事	の憤り甚だしく、私の氣に入らぬ 故敢てあがるので、皆様の要求とは別問題であります
57	の方は一段落となつたが、幹事の事に付ては	院主	の氣に入らぬ 故敢てあがるので、皆様の要求とは別問題であります。皆様に宜しい幹事
58	が、幹事の事に付ては院主の憤り甚だしく、	私	の要求とは別問題であります。皆様に宜しい幹事さんを連れて来てあげます」と、びつ
59	故敢てあがるので、	皆様	には宜しい幹事さんを連れて来てあげます」と、びつたりと断つて仕舞つた。而し此儘に
60	るので、皆様の要求とは別問題であります。	皆様	さんを連れて来てあげます」と、びつたりと断つて仕舞つた。而し此儘には置けないの
61	の要求とは別問題であります。皆様に宜しい	幹事	に迫つた。院主は「皆さんの命命する権利も又義務もありません」と断つたやうな峻拒であ
62	仕舞つた。而し此儘には置けないので激烈に	院主	は「皆さんの命命する権利も又義務もありません」と断つたやうな峻拒であつた。患者の
63	此儘には置けないので激烈に院主に迫つた。	院主	の希望は悉く水泡に歸し、内部の動搖甚だしく、院主に訴ふる聲は從順とははれし者
64	もありません」と断つたやうな峻拒であつた。	患者	を誹謗する聲は從順と云はれし者迄も一齊に唱えて、専横の念は更に なく、信仰も、服
65	し、内部の動搖甚だしく、	院主	は感情の動物かとは確かに思はれた。素志を貫徹せんが爲、院主の命も何も院主が、日
66	なく、信仰も、服従も殆どなく、全く	人間	に願書を出した。書文面は略す。古來天主教に於て斯くの如き粉擾は見ざる處と院主は
67	休で徒らに喧々囂々たる計りで、遂に靜間	輾轉	は激昂し、患者代表者十名を 煽動者と認め退院處分となつた。是れが為残餘の者も是れ
68	來天主教に於て斯くの如き粉擾は見ざる處と	院主	を煽動者と認め退院處分となつた。是れが為残餘の者も是れを援助せんとし
69	斯くの如き粉擾は見ざる處と院主は激昂し、	患者	の者も 退院處分となつた。合計三十名落交(雨を不顧はず門外に繰り出した。折から御殿
70	餘の者も是れを援助せんとして反つて二十	名	の調停に依つて 一と先づ事件は落着を告げた。 其の當時の病院の者は非常に墮
71	突く雨を不顧はず門外に繰り出した。折から	御殿場署	の者は非常に墮落して居て、時間の短縮より作業賃の値上げより、もつとく他力強
72	其の當時の	者	計りで、未だ家庭の味を知らぬ血氣盛りの者故、折々院前に觸れる事計りであつ た故、院
73	力強い卑しい考の	者	の味を知らぬ血氣盛りの者故、折々院前に觸れる事計りであつ た故、院主は嚴重に意見
74	力強い卑しい考の者計りで、未だ	家庭	故、折々院前に觸れる事計りであつ た故、院主は嚴重に意見して用いぬ者は退院處分した
75	者計りで、未だ家庭の味を知らぬ血氣盛りの	者	は嚴重に意見して用いぬ者は退院處分した故、平素の不満も退院の二字に恐れて仕方な
76	た故、院主は嚴重に意見して用いぬ	院主	は退院處分した故、平素の不満も退院の二字に恐れて仕方な 所に甘んじて居た所を、政府
77	た故、院主は嚴重に意見して用いぬ	者	と云新天地を發見するに至つて俄かに狂ひ始めた。如何に深い(○)信(○)に(○)入(○)
78	に甘んじて居た所を、政府	病院	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
79)無理(○)な(○)話(○)だ(○)。況んや未	信者	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
80)だ(○)。況んや未信者に於てをやだ。復生	病院	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
81	(○)。況んや未信者に於てをやだ。復生病院	逃走者	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
82	に於てをやだ。復生病院	○○	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
83	事件の内容は引略右の通りであるが、	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
84	件の内容は引略右の通りであるが、院主と	幹事	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
85	幹事との反目に付て今一筆書かねばならぬ。	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
86	故	患者	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
87	故患者の要求取次ぎを理由として	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
88	であるか、茲に其の二つの原因がある。一、	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
89	は如何程信仰厚き賢明なる人と雖も元より	西洋人	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
90	雖も元より西洋人で、人情風俗習慣の異なる	國	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
91	て價額以上の土地の買入、材木農具等二代目	幹事	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
92	莫大の金を儲けたが、之を少しも知らぬ。	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
93	たが、之を少しも知らぬ。院主は正直なる現	幹事	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
94	に受けて非なき	患者	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
95	非なき患者を迫出した事もある。之に反して	幹事	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
96	之に反して幹事は武士道的魂を以て嚴重に	院主	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
97	諺言耳に逆らうの通り之れが	西洋人	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
98	立腹した場合は誰が考えても知れる事を仲々	人	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
99	容れない風がある。之れに反して	日本人	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)
100	二には息を受けた	一女患	に於てをやだ。復生病院逃走者にも其の 原因に三種あり。一は情(○)慾(○)、二は是(○)

101	く先・で悪い事を云ふらして歩いての爲に、	患者	間の争いは絶え間なく、院主を罵り、幹事を罵り、院内は一時紊亂した。憎む可きは彼
102	く、	院主	を罵り、幹事を罵り、院内は一時紊亂した。憎む可きは彼の女である。爲に院主と幹
103	く、院主を罵り、	幹事	を罵り、院内は一時紊亂した。憎む可きは彼の女である。爲に院主と幹事は互に争ひ、
104	く、院主を罵り、幹事を罵り、	院内	は一時紊亂した。憎む可きは彼の女である。爲に院主と幹事は互に争ひ、反目して絶間
105	罵り、院内は一時紊亂した。憎む可きは彼の	女	である。爲に院主と幹事は互に争ひ、反目して絶間が無かつたのだ。私も其の信者と
106	時紊亂した。憎む可きは彼の女である。爲に	院主	と幹事は互に争ひ、反目して絶間が無かつたのだ。私も其の信者として是れを記す
107	した。憎む可きは彼の女である。爲に院主と	幹事	は互に争ひ、反目して絶間が無かつたのだ。私も其の信者として是れを記すを喜ば
108		私	も其の信者として是れを記すを喜ばぬが、院主と幹事様に此度は深くお詫びします。
109	私も其の	信者	として是れを記すを喜ばぬが、院主と幹事様に此度は深くお詫びします。
110	私も其の信者として是れを記すを喜ばぬが、	院主	と幹事様に此度は深くお詫びします。

図表 15

各図表番号	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	恩を受けて恩と思はぬわ所謂恩知らずで、	私	は此の事件の起るに當つて院の革正を促さんと血氣の 小勇に誇り、更に前後の考えも無く
2	謂恩知らずで、私は此の事件の起るに當つて	院	の革正を促さんと血氣の 小勇に誇り、更に前後の考えも無く聖職者を傷け却つて身を返く
3	小勇に誇り、更に前後の考えも無く	聖職者	を傷け却つて身を返くに至りしわ笑う可きの限りだ。事件 は警察の調停に依つて一端
4		警察	の調停に依つて一端落着いたもの、恥を知る以上べん・と止る事は出来ない。
5	り其罪の償いにと	院主	に眼を乞て六月三日夜の故郷を振り返るべく痛恨を起えて東京に着た時は 同月十四
6	同月十四日で、行路	病者	として仮收容所に居り、遂に目的病院に收容されたのわ八月十七日で、恰も先帝陛下
7	行路病者として仮收容所に居り、遂に目的の	病院	に收容されたのわ八月十七日で、恰も先帝陛下の御詔聞中の事とて、謹慎中の私には最
8	も	先帝陛下	の御詔聞中の事とて、謹慎中の私には最も大切な時であつた。流石は名に聞く
9	も先帝陛下の御詔聞中の事とて、謹慎中の	私	には最も大切な時であつた。流石は名に聞く病院に 職員も多く、設備も完全で、宗教
10	には最も大切な時であつた。流石は名に聞く	病院	に 職員も多く、設備も完全で、宗教の自由も與えられてあるので格別苦痛も感じな
11	私と	官立	と違ふのは、靈と肉、即ち靈的本位と肉的本位である。浮浪患者の割に多いのに反して
12	、靈と肉、即ち靈の本位と肉の本位である。	浮浪患者	の割に多いのに反して、喧嘩もなく、重見も廣く、反つて住みよい様だ。自
13	、重見も廣く、反つて住みよい様だ。思つた。	自分	の信仰と同じ者も居るので、永く御世話 になる事になつた。或日院長殿の御用との事、
14	になる事になつた。或日	院長	殿の御用との事、行て見ると其處に復生病院長が御出でになつて居た。 院長殿の取なし
15	院長殿の取なしに依つて特に私と川村某とだけ	聖父	の關係上御面會する事が出来た。私は嬉しさと恐ろしさに胸も一杯になつて、御挨拶
16	とだけ聖父の關係上御面會する事が出来た。	私	は嬉しさと恐ろしさに胸も一杯になつて、御挨拶の言葉も容易になつた。其れも其
17	も容易に出なかつた。其れも其苦、長い年月	我が子	の様に見て下さつた親より尊び御恩人に対して出る時には色々の窓口送した人が今目
18	に見て下さつた	親	より尊び御恩人に対して出る時には色々の窓口送した人が今目前に居るので全く度 臆を抜
19	に見て下さつた親より尊び	御恩人	に對して出る時には色々の窓口送した人が今目前に居るので全く度 臆を抜かれた。
20	御恩人に對して出る時には色々の窓口送した	人	が今目前に居るので全く度臆を抜かれた。早く詫びよと心の嘯き、漸く波立つ胸を
21	・と心の嘯き、漸く波立つ胸を押静め、「	神父さん	何卒私の罪を許して 下さい。貴方が一言許して下さいれば私は貴方の御許しの御言葉
22	き、漸く波立つ胸を押静め、「神父さん何卒	私	の罪を許して 下さい。貴方が一言許して下さいれば私は貴方の御許しの御言葉がなければ
23	下さい。	貴方	が一言許して下さいれば私は貴方の御許しの御言葉がなければ地獄に行きます。何卒許し
24	下さい。貴方が一言許して下さいれば	私	は貴方の御許しの御言葉がなければ地獄に行きます。何卒許して下さい。と振るえ乍ら
25	下さい。貴方が一言許して下さいれば私は	貴方	の御許しの御言葉がなければ地獄に行きます。何卒許して下さい。と振るえ乍ら云つ
26	て下さい。」と振るえ乍ら云つた。	師	は「心配することはありません。許します。過ぎた事は仕方ありません。以後は謹みなさ
27	ません。以後は謹みなさい。此處で	院長	さんの云事を聞かなければなりません。」と、私には其の聲が 非常に淋しく聞えた。先
28	ん云事を聞かなければなりません。」と。	聲	には其の聲が非常に淋しく聞えた。先年騒動の有り以前の師は體重二十二デもあつた。其
29	聞かなければなりません。」と、私には其の	聲	が 非常に淋しく聞えた。先年騒動の有り以前の師は體重二十二デもあつた。其の聲の大き
30	非常に淋しく聞えた。先年騒動の有り以前の	師	は體重二十二デもあつた。其の聲の大きさ！騒動後は絶えず病に犯されて、以前の様な
31	く聞えた。	私	は色々其後の事を想像して此の聲では生きざる事は六つ程敷いと思へば知らずくの内
32	内にヨが頼れた。	師	は私の手を取つて「泣くな、許します」と、此一言を残して歸宅された。果して私の罪は
33	内にヨが頼れた。師は	私	の手を取つて「泣くな、許します」と、此一言を残して歸宅された。果して 私の罪は許さ
34	罪は許されたであらうか？ 決して疑うなど	私	の罪は是れで許されたと聞く信じた。若しある時 院長が私をペルトラン師
35	院長が	私	をペルトラン師に逢はして下さらなかつたらば、遂に逢はて終るであ
36	なかつたらば、遂に逢はて終るであつた。	師	は五十一歳を一期として此世を去られた。今に復生病院の東方なる患者墓地に葬られてあ
37	歳を一期として此世を去られた。今に復生	病院	の東方なる患者墓地に葬られてある。嗚呼ペルトラン氏は死んだであら
38	て此世を去られた。今に復生病院の東方なる	患者	墓地に葬られてある。嗚呼ペルトラン氏は死んだであらうか否今尚天に
39	だであらうか否今尚天にましまして可憐なる	病者	の爲に其の幸福を祈りつゝあるであらう。在天の父よ！ 病める諸士の爲に天主に御
40	在天の	父	よ！ 病める諸士の爲に天主に御取次きを願奉る。垂蓋。
41	在天の父よ！ 病める	諸士	の爲に天主に御取次きを願奉る。垂蓋。
42	在天の父よ！ 病める諸士の爲に	天主	に御取次きを願奉る。垂蓋。

図表 16

各図表番号	先行文脈	キーワード	後続文脈
1	癩病	者	を全部收容して下さい。最も國家の經濟上不可能事かも知れませんが、現在都下各所の
2	癩病者を全部收容して下さい。最も	國家	の經濟上不可能事かも知れませんが、現在都下各所の浮浪者だけでも嚴重取締つて下さ
3	者だけでも嚴重取締つて下さい。	扶養義務者	に引渡された人達は今更國へも歸れず、旅から旅へと流 浪して社會に毒を流し
4	重取締つて下さい。扶養義務者に引渡された	人達	は今更國へも歸れず、旅から旅へと流 浪して社會に毒を流します。日暮里、田端は其
5	浪して	社會	に毒を流します。日暮里、田端は其の果敢、自宅隔離及之等何も當てになりま
6	患者	患者	を取締るに嚴重なのは誠に結構です。而し其者としては餘り有難くないが、國家人
7	者を取締るに嚴重なのは誠に結構です。而し	其者	としては餘り有難くないが、國家人道の爲と思へば何んともありません。其の代り一つ
8	です。而し其者としては餘り有難くないが、	國家	人道の爲と思へば何んともありません。其の代り一つ御願があります。一、療養所
9	一、	療養所	を千人迄とする事 一、瑣界を排して外山の自由を許す事 一、金生院と
10	一、	金生院	と慰勞園と復生病院との長所を取つて研究して下さい 復生病院は治療の不完全
11	一、金生院と	慰勞園	と復生病院との長所を取つて研究して下さい 復生病院は治療の不完全と情慾の壓迫。
12	一、金生院と慰勞園と	復生病院	との長所を取つて研究して下さい 復生病院は治療の不完全と情慾の壓迫。 金生院
13	金生院の最も苦痛とする所は衰弱なる	者	にあり。是れに多少の金を施して下さる方法に關照し、 逃走を防ぐには浮浪患者に根柢
14	逃走を防ぐには浮浪	患者	に根柢最も深し。是れを取締る事第一、次は待遇如何に依つても容易に 出來ると思ひ